

聖徒の道 11 1983





末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スベンサー・W・キンボール
マリオン・G・ロムニー
ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
ハワード・W・ハンター
トマス・S・モンソン
ボイド・K・バックナー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ベリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト
ニール・A・マックスウェル

顧問

M・ラッセル・バラード
ローレン・C・ダン
チャールズ・D・ピネガー
チャールズ・A・ディディエ
ジョージ・P・リー

編集長

M・ラッセル・バラード

国際機関誌

編集主幹：
ラリー・A・ヒラー
編集副主幹：
デビッド・ミッチェル
子供の頁編集：
ボニー・ソーンダース
レイアウト・デザイン：
マイケル・カワサキ

もくじ

知識を知恵に……………	マリオン・G・ロムニー……………	1
質疑応答……………	ジャック・ウェイランド……………	8
●特集1 / 150年前に授けられた健康の律法……………	ジェリー・アバント……………	13
タバコ, アルコールを幾つかの病気の	…ジョン・H・ホルブルック博士……………	16
関連性から考える		
現世の生活にかかわる律法と主の民……………	ロイ・W・ドクシエ……………	18
知恵の言葉とそのガン予防上の効果……………	チャールズ・R・スマー上博士……………	21
人生を変えた知恵の言葉……………	ウンベルト・コントラゾージ……………	23
サッカーと知恵の言葉……………	ラファエル・ダントン・テイシェイラ・ダ・グーニャ……………	25
私がコーヒーをやめるまで……………	ルイザ・ピタローニ……………	26
証を思い起こす……………	ゴドフレド・H・エスグエラ……………	28
素晴らしい冒険……………	イレイン・キャンノン……………	30
●特集2 / 教会での子供たち……………		39
小さなお友だちへ……………	ローレン・C・ダン……………	49
せいしょにでてくるきょうだい……………	アグネス・ケンプトン……………	53
おれないほうき……………	ビバリー・スワードロー・ブラウン……………	54
ローカルページ……………		60
モルモニズム……………		表3

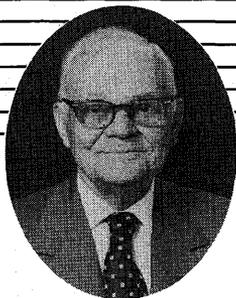
■知恵の言葉として知られる啓示は今から約150年前に与えられた。本号では教義と聖約89章の啓示と、その教えに従う者に与えられる数々の祝福、現代の医学者の見地などを学ぶ。知恵の言葉に従う末日聖徒の多くは長寿を保ち、人生を楽しんでいる。

1983年11月号 聖徒の道 第27巻第11号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-10-30
電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社
定価 年間予約/海外予約2,200円(送料共)
半年予約1,100円(送料共)
1部180円, 大会号350円

International Magazine PBMA0631JA Printed in Tokyo, Japan.
©1983 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.



知識を知恵に

第一副管長

マリオン・G・ロムニー

何年か前ある人が、アメリカ海軍将校であり、北極探検家であったロバート・ピアリーの極点への旅に関する記事の中で、今の時代にも通ずる重要な事柄を述べていました。

「この旅行で〔ピアリーは〕日が出ている内は北極へ進み続けた。夜になって、その時の緯度を測定するために、到達地点の位置を確認し、彼は非常に驚いた。朝いた地点よりもはるかに南だったのである。

1日中北に向かって進んでいたと思っていたのだが、彼が走っていたのは大きな氷山の上だった。そしてその氷山は海流によって南へ流されていたのである。

皆がこの氷山の上において、ある方向に進んでいるのに、基盤そのものが着実に別の

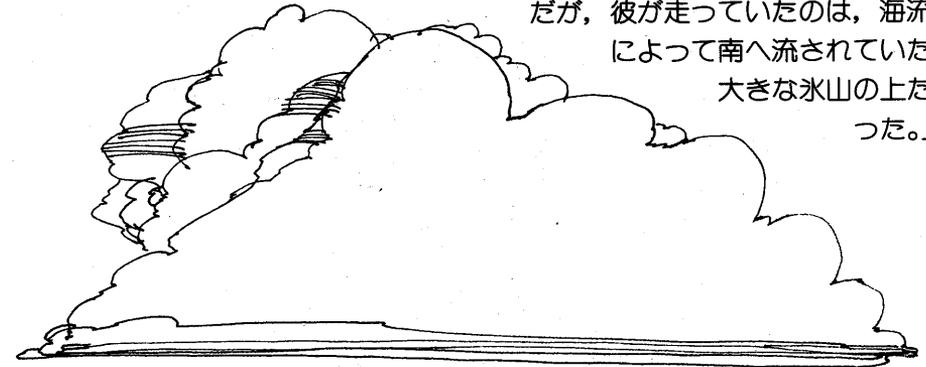
方向へ進んでいるというようなことを、私は時々思うことがある。

我々は驚異的なスピードと勢いで発明発見への道を進んでいる。それはピアリーの極点征服も色あせるほどのものである。医学、工業技術、食糧供給、機器、研究技法、製法などの面での、この50年間の進歩はそれ以前の500年の進歩を上回るものである。

しかし、同時に、我々が足を置いている基盤そのものは、海流に流されて、着実に後退しているかに見える。それでも、社会的な潮流は理解するにはあまりに深く大き過ぎて、それを抑えることなど、なおさら不可能である。

我々は歴史上のこの時期における人類の状態の緯度を知るために、自位置を測定し、

「1日中北に向かって進んでいたと思っていたのだが、彼が走っていたのは、海流によって南へ流されていた大きな氷山の上だった。」



自分たちが父や祖父の時代より『はるかに南』にいることを知って、ピアリー以上に驚き、度を失っている。

20世紀もすでに3分の2を経ているが、その歩みは、19世紀の夢や目標からの大きな逆行を証言している。我々は今、自然を征服し、人類の将来を左右する力を持つ新たな技術を手にしながら所期の目標からさ

らに遠ざかっているようである。(Sydney J. Harris, *Desert News*, Jan. 7, 1964, p.14)

シドニー・ハリスのこの記事を読み直すと、現代のさまざまな状況を的確に要約しているように思えます。確かに人類は多くの分野で、かつてなく多くの知識を獲得しています。「医学、工業技術、食糧供給、機器、研究技法、製法などの面」で私たちは

これまでに、かつてない進歩を遂げ、現在もその進歩を続けています。これらの分野における知識の集積速度は非常に早く、人々はほとんどそれに追いつけない状況にあります。しかし、それらの知識の多くは実用に移され、実際に私たちの生活様式を変えています。

別の分野での知識の伸長もあります。人間の個人的な行動、対人関係などに関する知識です。しかし残念なことに、この領域で獲得した知識は先の例のように有益な目的のために応用されていないようです。その良い例が、肺ガン発生率を非常に高めるという事実があるにもかかわらず、一向にやむことのない喫煙の習慣です。家族関係という分野でも、その例を挙げることができます。離婚の原因、それがもたらす害悪については、すべての人が知っています。また結婚生活のカウンセラーや福祉機関なども、非常に多くの働きをしています。にもかかわらず、離婚率は今なお上昇の一途をたどっています。

これらは、「歴史上のこの時期における人類の状態の緯度を知るために、自位置を測定し、自分たちが父や祖父の時代より『はるかに南』にいることを知って、ピアリー以上に驚き、度を失っている」という判断の裏付けとして引き合いに出される多くの事例の中のふたつに過ぎません。

さて、私がこれまでに述べてきたのは、別に目新しいことではありません。現代の閉塞的な状況は多くの人が認めているところであり、これまでも数多くの解決案が提唱されてきました。国際連合に希望を託す人もいます。教育こそ問題解決への鍵だと言う人もいます。また、経済に関する知識だという人もいれば、軍備だと言う人も

います。

これらの提案がそれぞれに効能を有していることは疑いありません。しかし私の考えではこれらのどれひとつ、またすべてを一緒に採り上げたとしても、致命的な弱点を直すことはできないでしょう。なぜでしょうか。それはこれらの提案の中には、故意にか偶然にか、その弱点に対する考慮がなされていないからです。すでに述べたように、その致命的な弱点とは個々人の行動や、地域的、国家的、国際的レベルでの人間関係に関する知識を有効に應用する力がないという点です。前にタバコの例を挙げましたが、多くの人を俗的な生活の中へ巻き込んでいる不徳な行ないについても同じです。

程度の差はそれぞれに違いますが、同じことが正直ということを始め、他の道徳的な原則についても言えます。世の多くの人人は、人をとりこにするサタン^{サタン}の教えについて知っていることを、知恵をもって実践に移していく力を少しも持っていません。彼らは、自分の力の用い方という点において、まるでかえるのような反応を示します。急に熱いお湯の中に入れられたかえるは、すぐにそこから飛び出すそうです。ところが、水の中に入れて、その器をストーブの上にかけておくと、煮えたられて死ぬまで、その中にい続けるということです。道徳の問題で、多くの人はかなり熱くなっているお湯の中に漬かっているのではないのでしょうか。

多くの人が、私たちのたったひとつの希望は、神とその戒めに立ち返ることだと、正しい指摘をしています。例えばチャールズ・リンドバーグは若い頃には、「科学は人間よりも神よりも大切」で、「高度に発達し

アメリカの飛行家チャールズ・リンドバーグはこう言っています。「現代人は科学の物質的な力を、神の靈的な真理によって方向づけなければならない。」



た科学がなければ、生存のための力を持つことができない」と考えていたと言っています。しかし、第二次世界大戦後にドイツを訪れた彼は、かつて世界の科学の先頭に立っていたその国が、爆撃によって受けた被害の有様を目の当たりにし、こう言っています。「私は〔そこで〕、人類が生き延びていくには、現代人は科学の物質的な力を、

神の靈的な真理によって方向づけなければならないということを学んだ。」(Reader's Digest, February 1964, pp.95-96)

もちろん私たちはこうした考えに同意するものです。しかし、こうした考えも、タバコと肺ガンについての統計的データや離婚や道徳的墮落に関する報告と同様に、具体的な成果となって表われていません。そ

のような行ないをする人々は、「信心深い様子をしながらその実を捨てる者」(IIテモテ3:5)なのです。これらの統計の数値も報告書も、一人一人の習慣を変えたり、道徳や理性の面における確実な低下を食い止めることはありません。

私は人間が手にしている膨大な知識、物質面での進歩、未解決の問題、道徳の低下について考えた結果、現代の様々な問題は知識の不足よりも、知恵の不足に大きくその原因を発しているという結論に達しました。私たちが今本当に必要としているのは、何が知識を知恵に変えるのかを知り、それを身につけることです。

ある辞典は、知識とは「理解すること、認識すること、知っている事柄」、科学とは「特に自然界の法則などを組織体系化した正確な知識」、また情報とは、「特に読書、観察などを通して、伝達、取得する知識」であると定義しています。そして、それらと区別される知恵については、「特に実生活、行動面において、物事を正しく判断し、対処していく能力」と定義しています。今の時代が墮落しつつあるのは、この能力が不足しているところに原因があります。知識を知恵に変えるこの能力の発達は、主の教会の一員となり、聖きみたまを伴侶とし、その導きを受ける人々に祝福のひとつとして与えられるものです。

知識が「理解すること、認識すること、知っている事柄」であり、知恵が「特に実生活、行動面において、物事を正しく判断し、対処していく能力」であるとすれば、知恵は知識を基とし、知識に依拠しているということになります。

モルモン経は特に、神の知恵をその知識に関連付けて述べています。人を救うため

の神の計画に関連して、リーハイはこう書いています。「万物は万物を知る者の全智によって成った。」(IIニーファイ2:24) 神の完全な知恵が、万物への知識によって成ったものであるように、人間の知恵も、その知識の上に成り立つものです。しかし人間はすべての事柄を理解していないために、前にも述べましたが、無知の部分がかなりあり、知恵、すなわち「実生活、行動面」での……〔既知の〕知識に欠けたままの状態にあります。

人間は大きく分けて、ふたつの点で知恵に不足しています。第1は万物を理解しているわけではないという点、第2は、既得の知識を最大限に活用する能力を持っていないという点です。

では、進歩向上の望みはあるのでしょうか。あります。ひとつの道が確かにあります。その道とは、生ける真の神を知ることです。

詩篇の作者はその答えを、「主を恐れることは知恵のはじめである」(詩篇111:10)と述べています。私はここで用いられている「恐れること」という言葉について少し調べましたが、それは決して恐怖感という意味ではないことを、はっきり申し上げたいと思います。詩篇の作者がこの言葉を用いて表現しようとしたのは「畏敬」の念なのです。辞書の中でも「恐れ」の定義のひとつとして、「畏敬」ということが書かれています。ですから、もっと分かりやすく書けば、「主を恐れ敬うことは知恵のはじめである」ということになります。

畏敬の念、すなわち深い敬虔な思いということについて少し考えてみましょう。ここに言う「深い」とは心の底からのという意味です。敬虔は真の宗教の核となるもの

です。本当に敬虔な人とは、神と神にかかわりのあるすべてのものに対して恭しい態度をもって、心からの礼拝を行ない、神を愛し、信頼し、祈り、自分を委ね、靈感を受ける人です。主の靈感は神に対して心からの敬虔な思いを持つすべての人に与えられましたし、今も与えられています。

知恵の重要な働きのひとつに、正しい判断をするということがあります。正しい判断をする時に主から与えられる靈感は、無知、すなわち知識の足りない点を補ってくれます。実際にそういうことがよくあります。例えば、まったく初めての土地に来て、ある交差点に来た人がいるとします。どちらへ進んだら良いのかまったく分かりません。そういう場合でも、神の靈感を受けることができます。そして、まるですべてを知り尽くした人のように、正しい決定をすることができるのです。なぜでしょうか。神がすべてを御存じだからです。神から与えられる靈感は、完全な知恵のひとつの表われなのです。

神からの靈感は知識の不足を補ってくれるだけでなく、自己訓練を通して、個人的な行動、対人関係の面でも、知識として知っている最も高度な標準に従うよう励ましを与えてくれます。別な言い方をすると、それは私たちに、知恵と知識の区別を判断する力を与えてくれるのです。

確かに詩篇の作者の、畏敬の念は「知恵のはじめである」という言葉は靈感によって与えられたものです。

言うまでもないことですが、未知のものに対して敬虔の念を抱くことはできません。逆に言うと、神に対して最も深い畏敬の念を持っている人は、神を最もよく知っている人ということになります。

問題全体を要約するとこういうことです。つまり、今の世の中に知恵が不足しているのは、人々が神を知らないからなのです。神を宣べ伝えている人々にしても、全部が全部、神を知っているとは言い切れない状態です。神を知らない内は、他の知識をどれほど多く得ても心の混乱が続きます。

すべてを御存じの主は、今の世の中を予見し、はるか昔、予言者イザヤを通して、この時代の人々について、次のように宣言されました。「賢い人の知恵は滅び、さとい人の知識は隠される。」(イザヤ29:14。ニ一ファイ27:26参照)主は現代において、このことを確認し、人の知恵は滅び、悟りは価値のないものになったと語っておられます。そして、人々が知恵を無くし、主を捨てた理由を、次のように具体的に挙げています。

「彼らは主の義を打建てんために主を求めずして、あらゆる者おのが心のままに振舞いおのれらの神の姿を求めれども、その姿は人の世の像……なり。」(教義と聖約1:16)

主はまた、知恵のない人々が行き着く先を、繰り返し明確に教えておられます。私は、その行き着く先は、決して心安まる所でも、楽しい所でもない、はっきり申し上げておきたいと思います。

もし人が自分の生涯において知恵を求めたいと思うなら、まず第一に、主を求めて、「主の義を打建て」なければなりません。そして自分に罪があることを自ら悟る必要があります。そして真心から正直な目的をもって、主を呼び求めるのです。(IIニ一ファイ31:13参照)「求めよ、そうすれば、与えられるであろう」(マタイ7:7)という言葉は昔も今も変わることはない公理であり、

約束です。ほかに方法はありません。そしてこれを行なうなら、神を知る知識へと導かれることでしょう。そして、その知識が元になって、詩篇の作者が知恵の初めと言った「畏敬の念」が湧いてくるのです。

神は人類をこの脱出口に導くために、今の神権時代に再び、御自身と贖い主なる愛子イエス・キリストを顕わし、神を知りたいと願う人が歩まなければならない道を、自ら啓示して下さいました。まず最初に私たちは、主御自身が定められた方法、つまり、祈りと、現代と古代に与えられた神のみ言葉、特に現代の啓示を学ぶことによって、神を求めなければなりません。祈りをし、聖典を学ぶならば、永遠の父なる神と御子イエス・キリストの信仰に導かれます。第二段階は悔い改めです。そして、信仰と悔い改めの後にくるのがバプテスマであり、続いて聖霊が付与されます。イエス・キリストの福音に定められたこれらの第一原則と儀式を受け入れ、それに従い、神の戒めを守り通すならば、神を頭の中で理解するだけでなく、みたまを通して理解することも可能になるのです。それは知恵の始まりと言われる畏敬の念を基として与えられるものです。こうして与えられる知恵は、個人的な問題の解決へと導いてくれます。しかし、さらに多くの人がこの知恵を得るならば、今の時代が直面している大きな問題を解決することもできるのです。

私は、知恵を養うことは、この教会の会員が目標とすべき非常に重要な事柄であると、強く訴えたいと思います。私たちは、主の靈感を通して与えられる知恵の重要性を理解することができなければ、高価な真珠を見失ってしまうことになるでしょう。

私たちがそれを見失うことなく、その大切さを心に刻み込むように願うものです。

ホームティーチャーへの提案

担当家族との話し合いの中で、以下の点を強調するとよいでしょう。

1. 現代の様々な問題は知識の不足よりも、知恵の不足に多くの原因を発している。私たちが今本当に必要としているのは、何が知識を知恵に変えるのかを知り、それを身につけることである。
2. 神を知らない内は、他の知識をどれほど多く得ても心の混乱が続く。
3. 知識を知恵に変えるこの能力の発達は、聖霊の導きを受けることによって得られる祝福である。
4. 主に対する心からの畏敬の念は知恵の始まりである。
5. 知恵の重要な働きのひとつに、正しい判断をするということがある。正しい判断をする時に主から与えられる靈感は、無知、すなわち知識の不足を補ってくれる。神から与えられる靈感は、完全な知恵のひとつの現われである。

話し合いを進めるために

1. 主から知恵を授かることについて、自分が感じていることを話す。家族にも感じていることを話してもらおう。
2. このメッセージの中に、家族に読んでもらったり、話し合ったりするとよい聖句や言葉はないだろうか。
3. 訪問する前に、家長と話し合っておく必要はないだろうか。定員会指導者や監督から家長にあてられたメッセージはないだろうか。

150年前に授けられた健康の律法

ジュリー・アバント

教会初期の頃から幾多の末日聖徒の生活に影響を及ぼしてきた知恵の言葉は、約150年前に授けられた啓示である。

この始まりは、1833年、オハイオ州カートランド。タバコの汚れが染み付き、もうもうたる煙がこもる部屋でのことで、エマ・スミスが夫の予言者ジョセフ・スミスに、主にうかがいを立てて欲しいと促したのが発端となった。その答えとして与えられたのが、現在の教義と聖約89章、すなわち知恵の言葉として知られる啓示である。

知恵の言葉は初めから教義と聖約の89章に収められていたわけではない。1835年版の教義と聖約では80章に、1845年版では81章に収められていた。89章になったのは、1876年版以後である。この戒めは、過去1世紀半の間、教会員に長命と、健全な生活をもたらししてきた。

1868年にブリガム・ヤング大管長はこう語っている。「私はその時そこにおいて直接目

撃したわけではないが、すべての教会員と同様、知恵の言葉が与えられている元と違った様々な背景を知っている。」

そしてヤング大管長は、予言者ジョセフ・スミスとその妻エマが、ニューエル・K・ホイットニーの店に隣接する部屋に住んでいた時のことを話している。彼らの台所は、ジョセフ・スミスが啓示を受け、最初に予言者の塾として、兄弟たちに教えを与えた部屋の下にあった。

「兄弟たちは11×14フィートほどしかない小さな部屋で開かれる塾に出席しようと、はるばる数百マイルの旅をしてやってきた。そして朝食の後でこの部屋に集った時、彼らはまずタバコに火をつけた。そしてタバコの煙の中で神の王国の偉大な教義を語り合ったのである。部屋中至る所にタバコの煙がただよっていたのである。パイプのタバコがなくなるや、今度はかみタバコである。このような状態だから、予言者が講義

ジョセフ・スミスは啓示を受け、
予言者の塾で兄弟たちに教えた。



をしに部屋に入ると、部屋の中が煙でかすんでいることがしばしばあった。

このことと、彼の妻が床が非常に汚れていつも掃除をしなければならぬと不平をこぼしたことから、予言者はこの件について思いをめぐらし、長老たちがタバコをすうことに関して主に伺いを立てた。その結果下されたのが知恵の言葉として知られる啓示である。」(*Journal of Discourses*, Vol.12, p.158)

しかし、1800年代初期の社会生活や商取引上の習慣は、決して知恵の言葉に対する良い土壌とは言えなかった。酒、タバコ、コーヒー、紅茶などは必需品と考えられ、取り引きのための手段として用いられることもよくあった。

契約に応じ、ウイスキー、タバコ、コーヒー、紅茶などが賃金や債務の支払いの一部に当てられることも少なくなかった。開拓者たちは、草原の野生動物や数多く飼育していた牛の肉に、毎日の食生活のかなりの部分を依存していた。したがって、ある人たちにとって、肉を控えるようにという新しい啓示を受け入れるのは困難なことだったのである。

多くの人々は、ヤング大管長が総大会の席上公式に宣言した1851年9月9日まで、その啓示を戒めとしては考えていなかった。

(*Millennial Star*, Feb. 1, 1852) しかし、ジョセフ・スミスは「教会歴史」第2巻、482ページの中で、1837年5月28日の教会の総大会において、会員たちは「知恵の言葉をその言葉通りに守ろうとしない人や、守っていない会員とは、交わりを持たないと

満場一致で決議した」と書いている。

ジョージ・Q・キャノン副管長は1892年11月15日の「ジューブナイル・インストラクター」の記事の中で、多くの教会員が「幸福や健康、体力の維持に関するこれらの律法の重要性を認識して」いなかったようであると述べ、さらにこう続けている。「古くからの習慣が彼らに染み付いていて、それをぬぐい去るのは困難なことに思えた。」

キャノン副管長はその後で、こう約束している。「神の民が心身両面で、地上のあらゆる民に秀でた者となるには、まだ時を待たなければならないが……私たちは他の民が受けていると思われるより大きな守りを約束されている。しかし、その約束には従い守るべき一定の条件がある。もしそれらの条件を守るなら、約束が効力を生じ始める。」

統計による数字は、この約束が果たされていることを証明している。例えば、ユタ州では人口の7割が末日聖徒であるが、モルモンの肺ガン罹患率は全国平均の65パーセント以下である。ユタ州内のモルモンでない人々の肺ガン罹患率は、全国平均とほぼ同数字を示している。ユタ州における1981年度のタバコ消費料は、1日平均6.5本。それに対して、全国平均は53パーセント高い、10本である。

統計はまた、知恵の言葉を守っている人人は心臓発作、卒中、その他致死率の高い病気の発生率が低いことを示している。例えば、ユタ州のモルモンの心臓発作による死亡率は全国平均を35パーセント下回っている。

タバコ, アルコールを幾つかの 病気との関連性から考える

ジョン・H・ホルブルック博士

医学はタバコ、アルコールの摂取が、
心臓病、ガン、肺気腫、慢性気管支
炎、肝変態などを含む幾つかの病気からくる
早死、^{はいしつ} 廃疾との関連性を示す証拠を提供
している。また、あまり一般には公表され
ていないが、タバコやアルコールなどに含
まれる物質が神経系統に数多くの悪影響を
及ぼすことを明らかにしている調査もある。

火の付いたタバコは、数千種類もの化学
製品を生産する工場を小さくしたようなも
のである。1日1箱タバコを吸う人は、1
年に5万回以上紫煙を吐き出し、脳を含む
数々の器官に、実に様々な種類の物質を送
り込む。タバコから発生するニコチン、一
酸化炭素、シアン化水素などの物質は、神
経系統に有害な影響を及ぼす。

ニコチンは神経系統を刺激すると共に、
その機能を抑制し、他の器官にも間接的に
悪影響を及ぼす。またニコチンは喫煙の習
慣化を促す大きな要因であるとも考えられ
ている。

一酸化炭素は有毒ガスであり、細胞への
酸素の運搬、供給を妨げる。タバコを吸う
人の血液中の一酸化炭素の量は、吸わない
人の2倍から15倍はある。血液中の一酸化
炭素は微量でも知覚機能の低下やめまいに

似た症状を引き起こす。

シアン化水素は細胞の呼吸を妨げ、細胞
内の酸素量を減少させる毒素である。

喫煙は脳や心臓の動脈^{きょうまく} 狭窄の促進とい
う危険性を、さらに増大させる。こういっ
た血管の障害は脳への酸素供給量の低下や
脳卒中の原因となる。タバコを吸い、なお
かつ経口避妊薬を服用する女性は、ある種
の脳卒中において、20倍以上の発病率を示
している。喫煙、肺気腫、慢性気管支炎な
どによる肺疾患は、脳への酸素供給を妨げ
二酸化炭素過多をもたらす。それによって
引き起こされる脳機能の障害は、知覚麻痺、
昏睡状態へと進むこともある。

タバコから出る有害物が子宮内に及ぶと、
胎児の神経系統に悪影響を及ぼす。妊娠期
間中に喫煙した女性が出産する子供は、タ
バコを吸わない女性から生まれる子供より
も小さい。この胎児の成長の遅れは、頭部
の大きさを含め、あらゆる面に及ぶ。長年
の調査の結果、妊娠中に喫煙していた女性
から生まれた子供は、知能、感情、行動面
における成長が、タバコを吸わない女性が
出産した子供より遅いということが明らか
にされている。妊娠中に喫煙していた女性
数千人を対象としたイギリスのある調査で

は、そういう女性たちの11歳になる子供たちは、そうでない女性から生まれた子供たちと比較して、読書や算数の力、一般的な能力において、数カ月遅れているという結果が出ている。

要約すると、タバコから生じる物質は、神経系統の組織と機能に有害な影響を及ぼすということである。また、タバコには神経系統に悪影響を及ぼすと思われるもので、まだ十分に研究されていない物質が数多く含まれている。それらの物質が及ぼす影響については、現在のところ、まだ研究段階にある。

タバコと対照的に、アルコール性飲料に含まれる物質で、医学的に重要なのは、エタノールだけである。エタノールは神経系統の機能を低下させる。エタノールはまた、理解力、判断力、理論的な思考力を鈍らせる。急性アルコール中毒の症状は、軽いものではろれつが回らなくなったり、体がふらついたりするなどから、重症になると昏睡状態や死に陥るものまで実に様々である。そしてアルコールの常用をやめると、けいれん、幻覚、てんかんなどの発作を起こしたり、外傷や病気の感染、循環器系の障害によって死に至ることもある。ほとんどの慢性アルコール中毒患者は、バランスの取れた食生活をせず、そのために、ペラグラ病、脚気、壊血病、貧血などの栄養不足による病気を悪化させるケースが多い。

これらの疾患は通常、末梢^{まつしよう}神経系、脊髄^{せきずい}、脳などの機能に影響を及ぼす。アルコール中毒患者は、脳機能の部分的、また一般的な低下をもたらす神経病に対する自覚がほとんどない。

最近、アルコールが胎児に及ぼす悪影響についても多くの事柄が知られるようになってきている。アルコール中毒者を母とする幼児には、最も深刻な影響が出ている。その幼児たちは精神的な発育がかなり遅れ、様々な先天性の疾患があるようである。発育中の胎児を守るためには、母親にどこまでアルコールの摂取が許容されるかという明確な線はまだ出されていない。そのために、医師は妊娠期間中の飲酒を避けるよう妊婦に勧めている。

タバコにしてもアルコールにしても常用癖がつきやすいものである。喫煙者の多くはできればタバコをやめたいと思っているが、それを試みて成功した人の数は2割以下である。タバコの禁断症状として顕著なのは、タバコへの強い欲求、不快感、不眠、知覚障害、心拍の減少、脳波の異常などである。生理的な異常は普通数日で終わるが、精神的な症状はその後も長く続くことがある。

タバコ、アルコールの常用者は情緒的にも感情的にも、そして知的な面においても高いつけを支払わされることになる。

結論を言うならば、タバコやアルコールは胎児、幼児、成人を問わず神経系統に数多くの悪影響を及ぼす。これらを口にしない人々は、精神的にも最大の喜びを味わい、さらには「知恵と知識の大いなる宝まことに隠れたる宝を見出す」ことができる。

*ユタ大学の内科学準教授を務めるホルブルック博士は、喫煙と健康に関する医学誌の編集者であり、アメリカ全国ガン学会顧問でもある。

現世の生活にかかわる 律法と主の民

ロイ・W・ドクシー

アダムから主御自身によって選ばれた弟子たちの時代に至るまでの、聖書に登場する人々と同じように、末日聖徒は、自分たちも今の世にあって主を代表していることを理解しています。予言者ジョセフ・スミスに与えられた啓示を通して、古代の契約の民に知られていた真理が、より明確な形で現わされました。そのひとつの例が、知恵の言葉として知られる、1833年2月27日に与えられた啓示です。

予言者はこれまで、啓示を通して、人に永遠の救いをもたらす知識と共に、現世における幸せをもたらすための律法も与え続けてきました。主はまた、この啓示の序として、現世での救いと霊的な救いの両方を強調し、次のように言われました。「われにかかわるすべては霊のことなり。われは何時たりとも、いまだ嘗て俗世の事にかかわる律法を与えたることなし。……わが誠命は霊に関わるものなればなり。」(教義と聖約29：34-35)

ある種の物を口にしないようにとの制限は、イスラエル人たちにも与えられていました。その制限が与えられたのは、特に、彼らの生活背景が原因でした。モーセの律法のほかに、よく知られているのは、ダニエルとその友の例です。彼らは捕らわれの境遇にありましたが、「王の食物」やバビロ

ンのぶどう酒を取らず、野菜だけで過ごすことを許されました。彼らはバビロニア人たちよりも健康で、「神は知識を与え、すべての文学と知恵にさとい者とされた。」(ダニエル1：17)

現代の知恵の言葉も、これに従う人には肉体と霊の両方に祝福をもたらします。有害な物を口にせず、正しい食生活をし、なおかつ他の戒めにも従うならば、報いが与えられます。

教義と聖約89章の初めの3節は、本文の啓示に先立ち、「靈感による序言、予言者による説明」として書かれたものです。こう書いてあります。「挨拶に送るべき言葉にして誠命または強制に依らずして啓示と知恵の言葉によりて語られ……」

知恵の言葉が与えられた時、多くの人々はこの序言のゆえに、それを義務として守るべきだと考える必要はないと思いました。なぜ主は、この啓示は義務として守るべき戒めであると明示されなかったのでしょうか。

1921年から1951年にかけて十二使徒定員会会員として働いたジョン・A・ウィッツォー長老は、特に教会が西へ移動した後の聖徒たちの困難な状況が、それに対するひとつの答えを示していると言いました。

「この開拓者たちの入植地では、総じて

食物は豊富であったが、種類はあまり多いとは言えなかった。肉がかなりの部分を占めていた。穀類も大体において入手可能であった。ただ野菜と果物は不足していた。泥酔するような例はほとんどなかったが、気付けのための自家製の酒、またタバコ（とは言っても大体はかみタバコである）、そして紅茶、コーヒーなどを用いることがよくあった。これらの物は、手に入る場合は、自由にまたよく用いられていた。しかしほとんどは人体の生理に関する正確な知識の欠如に起因する肉体的な苦痛である。こういった物で永続的な解放を得ることはできないのはもちろんである。」(Joseph Smith, *Seeker After Truth*, Prophet of God, Bookcraft, 1951, p.198)

ジョセフ・F・スミス大管長による、もうひとつの答えを見てみましょう。

「知恵の言葉が『誠命または強制』によらないものとして与えられた理由は明らかである。少なくとも当時、それが戒めのひとつとして与えられていたとしたら、これらの有害な物を常用していた人たちは、罪ありと宣告されることになったのである。それで主は、憐みを垂れ、人々をその律法の下に置く前に、克服する機会を与えられたのである。」(Conference Report, Oct. 1913, p.14)

1846年から1869年に、やはり十二使徒定員会会員として仕えたエズラ・T・ベンソン長老は次のように言っています。「主が知恵の言葉を戒めとして与えておられたとしたら、果たして私たちの中のどれだけの人がここにいたでしょうか。私には分からない。しかし主は、御自身の民がその教えに従う

なら、それは喜ばしいことであるとして、戒めでも強制でもないものとして与えられたのである。私たちは主を喜ばせようとしてよいものだろうか。」(Journal of Discourses, 11 : 367, Apr. 7, 1867)

ブリガム・ヤングは大管長の時に、聖徒たちに次のように話しました。

「なぜその欲求を抑え、自制し、キリストの律法の下に従わせようとししないのだろうか。どうしてなのだろうか。『たとえ罪に定められても、どうしてもタバコはやめられない』『罪だと言われても、コーヒーはやめられない』『そのために地獄に落とされる』などと言う人がいるが、それは天父に向かって、『私はあなたのことなど何とも思いません。あなたの戒めに従おうとも思いません。自分の道を進み、好きなようにやるだけです。たとえあなたの怒りを買っても、自分のやりたいことは大事にしていく積もりです』と言うのも同然なのである。そのような道を選ばずに、神がすべての人に与えておられるみたまに聞き従おうではないか。みたまは何が善か、悪を避けるにはどうしたらよいかを教え、すべての人に、私が命じたように行なわなければならない、私がキリストの軍の長であり、司令官である、私に従いなさいと語りかける。」(Journal of Discourses, 9 : 257, Mar. 16, 1862)

後に十二使徒定員会の会員たちは、ヤング大管長が総大会において、知恵の言葉の啓示は戒めであると宣言したことを、聖徒たちに再確認させました。(Brigham Young, Jr., *Millennial Star*, 57 : 82, Feb.

1883年の「^{いまじめ}誠命の書」は現在の教義と聖約の基であり、知恵の言葉の啓示を含んでいた。現在「誠命の書」は教会歴史部が保管している。

7, 1895 ; Francis M. Lyman, *Conference Report*, Oct. 1908, p.55)

知恵の言葉はその啓示が与えられて以来、すべての教会員によって、常に守られてきたというわけではありません。初期においては多くの人々が知恵の言葉の順守についてなまぬい受け止め方をしていましたが、「誠命または強制に依らず」という言葉をその弁明としていたように考えられます。この啓示の靈感による序言の中には、知恵の言葉の目的が次のように書かれています。「啓示と智恵の言葉によりて語られ、末の世に於けるすべての聖徒らに与えられるこの世の救いの中にある神の方式と御旨とを公にするものなり。

すなわち、これらは今聖徒と呼ばれ、或いは聖徒と呼ばれ得る者にして虚弱なる者、およびすべての聖徒中最も虚弱なる者の能力に適應する約束を有てる原理として下さるものなり。」(教義と聖約89：2，3)

以前からの習慣を断つのは困難なことであり、また、一部の人は明らかにそれを戒めとして考えていませんでした。にもかかわらずこの律法に従おうと努めた忠実な当時の聖徒たちは、現代の信仰ある聖徒と同じように、豊かに祝福を注がれました。彼らはこの世における救い(健康、経済面などの)と靈的な救い(「知恵と知識の大いなる宝まことに隠れたる宝」)を受け、さらに、その主のみこころを守るべきことは、十分明らかにされているとの理解を得たのです。彼らはその主のみこころを受け入れました。それは現代におけると同じように、

戒めに対するとまったく同じ姿勢でした。(2節)

「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである。」(マタイ7：21)

ヒーバー・J・グラント第7代大管長(1918-1945)が教会を管理した時代には、教会員はこの「末の世に於けるすべての聖徒らに与えられるこの世の救いの中にある神の方式と御旨」(教義と聖約89：2)に従う必要があると大いに強調されました。グラント大管長は、この啓示は戒めであると何度も強調しました。

それよりもはるか以前、ジョン・テイラー長老がブリガム・ヤング大管長の後を継いで大管長となった時に、総大会において教義と聖約と高価なる真珠に対して教会員の承認を求める提議がなされました。それまでこのふたつの聖典に幾つかの追加削除があり、大管長会がそれらに関して教会員の承認を得るべきだと判断したのです。この時の提議の中には、教会にその順守を求める次のような言葉がありました。「これらの書と、そこに書かれている事柄を神から与えられたままに、また、一個の民、一個の教会として我々に義務を課すものとして受け入れる……。」(*Journal History*, Oct. 10, 1880)

主は過去の時代には、民に憐みを示してこられました。しかし、長年にわたる教会の指導者、献身的な両親の働きによって、この戒めに対する従順の度合を引き上げて

ることができました。またそれを通して、多くの祝福が忠実な人々に注がれてきました。末日聖徒は靈的な救いと共に、この世における救いにも心を配る民として知られています。また、多くの場合アルコール、タバコ、茶、コーヒー、有害な薬物を口にしない民としても、人々に知られています。

予言者エゼキエルは末日の神の民について予言しました。その時、神はイスラエルの子孫を国々の中から集め、神はその民の

生活を通して人々に知られます。その予言とはこうです。「わたしがあなたがたによって、彼らの目の前に、わたしの聖なることを示す時、諸国民はわたしが主であることを悟る。」(エゼキエル36:23)

*教会コーリレーション査閲部長のドクシー兄弟はブリガム・ヤング大学宗教学部の前部長であり、知恵の言葉に関する著作もある。

知恵の言葉と そのガン予防上の効果

チャールズ・R・スマート博士

タバコ、アルコール、熱い飲料、肉の取り過ぎは健康に良くないと教える知恵の言葉が与えられたのは1833年であるが、この知恵を裏付ける科学による素晴らしい証明がなされるようになったのは、ようやくこの30年ほどのことである。同じことがガンの問題についても言える。

過去5年間にモルモンのガン罹患率りかんの低さ、また末日聖徒が人口の70パーセントを占めるユタ州におけるガン発生率の低さについて、数多くの科学的な記事が書かれていた。

非常に面白いのは、そういった調査の多くが、教会員ではないユタ外部の研究者によってなされている点である。それらの研究者の多くは、知恵の言葉の教えがガンの多くの危険性を避ける上で効果があるとい

う事実を認めている。アメリカのガンによる死亡率は全死因の20パーセント、年間に約44万人の死者数である。

ユタ州は性別、年齢別に見ても、ガンによる死亡率は他のどの州より低い。

喫煙を発生因子とするガンによる死亡率は最も低く、アメリカ全体の平均値を48パーセント下回っている。

数多くの研究の結果、喫煙者と非喫煙者を比較した場合、前者はほぼすべての種類のガンにおいて高い罹患率りかんを示していることが分かっている。部位別ぶいべつの発生率を見ると、口唇こうしん、舌、咽頭いんとう、喉頭こうとう、食道、肺など、直接タバコの煙に接する部分が最も高い。

しかし、煙に直接触れない離れた部位でも、高い発生率を示しているという興味深

い事実もある。例えば、非喫煙者と比べた場合、喫煙者の膀胱ガン罹患率は5倍、また、腎臓ガンは2倍以上、膵臓ガンは1.7倍である。

タバコと密接な関係にあるガン、すなわち肺ガン、口腔ガン、舌ガン、喉頭ガンは、禁煙することによって90パーセント以上を防ぐことができる。

(過去に、喫煙者が吐き出す煙を非喫煙者が吸い込んでも、何の害もないという主張がなされてきたが、現在では、タバコの煙はそれを吸うすべての人に有害であるという証拠が出されている。それは危険度の違いだけである。煙を吸う量が多ければ多いほど、ガン発生の確率も高くなる)

喫煙と関係あるガンの多くは、特に口腔、舌、喉頭、食道、胃などの部位において、飲酒とも関連している。両者の関連性は非常に密接で、ガン発生率の統計的研究においても、切り離して考えることは困難である。

ここ3、4年の間に、膀胱ガン、膵臓ガンとコーヒーの飲用との因果関係について、示唆に富む証明がなされつつある。この因果関係については、アメリカでの数多くの研究によって立証されつつあるが、まだ確証の段階までには至っていない。

女性の胸部の繊維細胞の疾患が、コーヒーの飲用と関連があるということは、これまでも言われてきた。幾つかの研究結果によると、胸部に包囊性疾患を持つ女性は乳ガン罹患率が高いともいう。しかし、おそらくこれは特殊なタイプの包囊性疾患を持つ、ごく少数の事例のみに関して言えることと思われる。コーヒーとの因果関係に

ついては、これらの予備調査を裏付けるための研究が続行中である。

知恵の言葉はタバコやアルコールを口にしないように戒めると共に、肉を過度に用いないようにとも教えている。ある種のガンは肉の取り過ぎと関係がある。例えば結腸ガン、直腸ガンなどである。このふたつはアメリカの部位別ガン発生率においては高位にある。一方、繊維性の食物の摂取は、そうしたガンの発生を抑えるという研究報告もある。

乳ガンの発生率は、太り過ぎの女性に高く、動物性脂肪の摂取によって増減するコレステロールとも幾分かは関連性があるようである。

25歳以前の出産を促す声とは裏腹に、母乳による子育てを避けようとする風潮があるが、乳ガン発生の危険率はこの25歳以前の出産、またおそらくは授乳によっても減じられるのである。

職業上の環境、また外的環境の中に存在する発ガン性物質の重要性について、新聞などで多くの事柄が報じられているが、ガンを防ぐ上で考慮すべき最も重要な事柄は、個々人の生活様式と、自分の体の中に悪い物を取り入れない健康な生活である。

ガンとの戦いは決して停滞してはいない。前へ前へと進んでいるのである。原因も究明されつつある。治療率も向上している。

*スマート博士は、アメリカ外科医師学会ガン部会部長、ならびにソルトレーク・シティーのLDS病院外科部長を務めると共に、全国ガン協会、アメリカガン合同委員会の一員でもある。

人生を変えた 知恵の言葉

ウンベルト・コントラゾージ

ある日曜日、タバコをくわえ、いつものブドウ酒を側に置きながら、テレビの前に座っていると、玄関の呼び鈴が鳴りました。ドアを開けると、ブルーのスーツに宣教師と書いた名札を付けた、ふたりの青年がいました。私がふたりを招き入れた部屋にはタバコの煙とアルコールの臭いが充満していましたが、彼らは嫌な顔もせず、私の信仰について尋ねてきました。私はまず、神を信じているかどうかを聞かれました。

私はしばらく考え込みました。私は小さい時にバプテスマを受けていましたが、教会には全然行っていませんでした。信仰など何の値打ちもないと考えていたのです。ただ、私は自分には良心があると思っていましたし、誠実でありたいという気持ちは抱いていました。ところが、口から出たのは信じているという言葉だったのです。彼らはさらに言葉を続け、ジョセフ・スミスと回復について話し始めましたが、何か前に聞いたことがあるような気がしました。得も言われぬ気持ちが湧いてきて、私はそのふたりの青年に強い親しみを覚えました。そして彼らが祈り始めると、涙があふれてどうすることもできませんでした。胸が一杯になり、張り裂けてしまうかと思うほどでした。

私たちは次の火曜日にレッスンをする約



束をしました。そしてその間、私はそれまでの自分の生き方を、映画を見るかのように思い起こしました。20歳になるまで、私は酒とは無縁の生活をしていました。ところが仕事上の失敗と経済的な重圧があって、私は最悪の事態に陥ってしまいました。さらにそこへ、妻の病気と遠隔地で2年間の入院療養生活という悲しみが追い打ちをかけました。そして、私はアルコールに慰めを求め、朝から晩まで酒浸りの生活に落ち込んでいったのです。その上に、1日70本から100本のタバコをふかしていたのですからたまりません。徐々にでしたが、自分でも困惑するほどに、健康をそこねてきました。

一度は体を治すために入院しましたが、医者にも手の施しようがなく、私はさらに気をめいらせていきました。私には良い仕事と素晴らしい家族がありましたが、この悪い習慣からは何とも抜け出せない状態でした。やけになって、もっと酒に溺れた生活をし、自殺まで考えたこともありました。開業医の治療を受けることも考えましたが、その費用の工面が付きませんでした。ソレンセン長老とウォーターマン長老が私の生

活の中に入ってきたのは丁度そんな時だったのです。

二度目のレッスンの時、ふたりの宣教師は初めて耳にするようなことをたくさん教えてくれました。頭で理解することはできませんでしたが、心の中で本当だと感じることができました。ところが、知恵の言葉のことを聞いた時はがく然としました。そして宣教師たちに言いました。「この私に酒をやめさせる方法なんてあると思うんですか。私はこれまでいいと思った方法は何でも試してきました。でも何ひとつ成功しなかったんですよ。」すると彼らは、神と主イエスを信じるかどうか、また、レッスンで学んだことを真実だと思うかどうかと尋ねてきました。私はうなずきました。

「それなら大丈夫。あなたにその気持ちがあるなら、私たちも手伝います。それに神様もその問題が解決できるように、力を貸してくれますよ。」「酒がやめられたら、それ以上の喜びはありません。」彼らの熱心な勧めは、私に喜びと希望と信仰を持たせ、私も彼らの言葉に従ってみようと心の底から思いました。祈りをすると少しずつ自信が湧いてきて、それまでになかった勇気が出てきました。そして、二度とコニャックは飲まないと自分自身に約束したのです。ひどい苦しみがあったものの、私はその約束を守り続けることができました。長老たちの助けと、低くへりくだることによって、徐々にタバコと酒の量を減らしていくことができました。それは簡単ではありませんでした。しかし、主がそばにいて、助けて下さっているのだという気持ちでいました。自分のなすべき分を行なえば、この試しの

中でひとり放っておかれることはないと感じていました。

ひと月半経ち、私はついに酒とタバコを断つことができるようになりました。完全に悪習を逃れた私は、これでバプテスマへの備えができたと確信し、妻と一緒に、1977年12月28日にバプテスマを受けることに決めました。身と霊を再新するバプテスマの水を出した時の私の心の中には、真の悔い改めをするなら、主は私たちの罪を赦して下さるという確信がありました。古い自分を脱ぎ捨て、自分自身への信頼感と人々への愛を胸一杯に満たして生まれ変わった時の喜びは、とても口で言い表わせるものではありません。私は、すべての戒めに従うという決意をもって主に感謝を捧げ、失われた時間をすべて取り戻したいと心の底から思いました。

バプテスマの後、私の健康状態は日に日に良くなっていきました。初めは、朝起きる時にひどい頭痛や苦しみがあり、とてもつらい時期が続きました。祈りをした後は落ち着いて夕方まで仕事に精を出すことができましたが、次の日の朝になると、また同じ苦しみが繰り返されました。ところがある日のこと、目を覚まして気が付いたのですが、とうとう痛みがなくなっていたのです。それ以来、その問題で悩まされたことは一度もありません。

バプテスマから1年して、私たちは神殿に行くことができました。そして妻と3人の娘たちと結び固めを受けたのです。今私たちの家族の心は本当に強く結ばれています。私はこれまでチャレンジに満ちた責任をたくさん受けてきましたが、へりくだり

ンリケ・ダ・パイシャオとウォルステア・ケイロシュ・ダ・パイシャオの間に生まれました。父はカトリック教徒で、母は結婚する前はメソジスト教会の活発な会員でした。この家族が教会を知ったのは、チタの叔父のひとりで、前にブラジル・ポーツ・アングリ伝道部の伝道部長を務めたウォルター・グエデス・デ・ケイロシュを通してでした。チタは1969年、11歳の時に母とふたりの兄弟と一緒にバプテスマを受けました。

彼はスポーツが好きで、教会や学校のサッカーのトーナメント試合に出ました。リトルリーグでの彼の活躍振りは「フラミンゴ」クラブの知るところとなり、彼はリオデジャネイロを本拠とするこのチームに入団しました。そして1979年にはナショナルチームの選手に選抜されました。

人気者チタの競技場内外での活躍や行ないは、報道陣からも好意的な扱いを受けて

きました。しかしチタはその名声を自分ではなく教会の宣伝のために使ってきました。例えば、彼はサンパウロ神殿での結婚の予定についての記者会見の中で、自分と婚約者は神殿で結婚し、永遠の誓約に入る資格を得るために、一定の水準を守った生活をしなければならないということを説明しました。その時彼は、特に知恵の言葉の原則について報道陣に語りました。

チタは、姉妹と共に、神殿で交わした永遠の誓約にふさわしい生活をしたいと言っています。目標はほかにも、戒めを守ること、日々接する人々に良い模範を示すこと、伝道の機会を生かすこと、またプロ選手としての生活と教会の標準を調和させることなどがあります。

*ダ・クーニャ兄弟はチタが所属する、リオデジャネイロ・アングレイステーキ部チジュンカワード部の監督。

私がコーヒーをやめるまで

ルイザ・ビタローニ

コーヒーを飲まなくなってから5年になります。コーヒーの臭いをかぐと、浴びるように飲んでいて当時のことを思い出します。今となっては、よくもあれほど飲んだものだと思われられない気持ちです。私の1日は必ず1杯のコーヒーで始まりま



した。母親として、また主婦としての仕事は、コーヒーというエネルギー源がなければとてもできないというのが、その頃の私の口ぐせでした。そして、その最初の1杯を飲んでしまうと後は、母が訪ねてきたから、またエネルギー補給のために、一服入れるためにと、何でも理由にして、1杯また1杯ととどまることはありませんでした。私は1日の始まりはコーヒーで迎えないといけないという確信と同時に、1日の終わりもやはりコーヒーで迎えないといけないと信じていました。理屈から言えばコーヒーは興奮剤だということは分かっていましたが、私はコーヒーを飲まなければ絶対に眠れないと強く信じ込んでいたのです。今になって思えば、結局、コーヒーびたりの生活をしていたのはそのへんに理由があったのではないかと思います。しかし、それだけコーヒーを飲んでいても、別に体が悪くなるようなこともありませんでした。

ふたりの宣教師の訪問を受け、福音について聞かされるまで、私はコーヒーと健康のことを真剣に考えたことはありませんでした。私は彼らのメッセージと、バプテスマのチャレンジを喜んで受け入れました。宣教師は私に、バプテスマを受けるには、知恵の言葉を受け入れ、当然コーヒーもやめなければならないと説明してきました。

彼らのその言葉に私は別に驚くこともありませんでした。そのチャレンジに応える心構えはできていたのです。しかし夫や娘たちはびっくりしました。彼らは私の生活の中でコーヒーがどれほど大事なものかを知っていたからです。そして、そんなことができるはずがないと思っていました。

しかし、私の内面の何かが変化していたのです。私は福音のメッセージを信じ、そのすべての教えを受け入れました。そうしていくにつれ、生活の中に安らぎがもたらされるのを感じ、主は私が戒めを守れるように助けを与えて下さることを知りました。

もちろん、コーヒーをやめるのは易しくはありませんでした。私の体はコーヒーに慣らされきっていて、やめてから1週間は千鳥足のような状態で、足が震えたり、腕の力が抜けてしまったような感じでした。しかし主の助けによって、コーヒーを飲みたいという気持ちはすでになくなっていました。もちろん、コーヒーポットに手が伸びるようなことはありませんでした。それはとても素晴らしい気持ちでした。そして私は何度も、ひざまずいてその助けと力を主に感謝しました。宣教師たちも私がどんな具合でいるかを見るために定期的に訪問し、励ましてくれました。危なっかし気に私を見ていた家族は、とても具合がいいという私の言葉を聞いて、いつも驚いていました。

バプテスマから今までの5年は幸せな日々でした。私は妻や母としての責任を果たす力を与えられ、その上、教会の数多くの責任を果たしてやることもできました。たまには疲れを覚えることもありますが、霊にはいつも余力があり、私を励ましてくれます。知恵の言葉と、その原則の実践を教えてくれた福音に対する証を持てたことは、とても大きな喜びです。

* ビタローニ姉妹はミラノ・イタリアステ
ーキ部の扶助協会会長

証を思い起こす

ゴドフレド・H・エスグエラ

 はなぜ教会に来なくなる会員がいるのか考えてきましたが、それは「忘れる」からだとの結論に達しました。

私が言う「忘れる」とは、単に何かが記憶の中から消え去るという意味ではありません。それは、何らかの理由でみたまとの触れ合いを熱心に求めなくなるという意味です。その熱意をもう一度取り戻すことさえできれば、再び活発な状態に戻れるようになるのではないのでしょうか。

ひとりの少年の話をしたと思います。彼はおとなではありません。まだ14歳の少年です。この少年はある教会の会員になりたいと思っていましたが、その教会が本当に神の教会かどうか確信が持てないでいました。様々な対立する考えを聞かされ、彼は混乱してしまいました。ある日、聖書を読んでいる時に、ひとつの聖句が心にとまりました。「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせず、惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。」(ヤコブ1:5)

この短い聖句に大きな力を感じた彼は、そこに勧められている通りに、神に願い求めようと決心しました。光の柱の中に現われたもうた御父と御子にまみえ、祈りへの答えを得たというこの少年の証は、彼自身



の言葉として高価なる真珠の中に収められています。(ジョセフ・スミス1:14-19)

そうです、この少年こそ、回復された教会の最初の予言者、ジョセフ・スミスです。

これほどの経験をしたジョセフが、その聖なる森での出来事を忘れてしまうなどということが考えられるのでしょうか。

末日聖徒イエス・キリスト教会は改宗者の教会です。証を持つすべての教会員はそれを、聖霊を通して授けられました。例えば、多くの改宗者はバプテスマを受ける以前から、何らかの霊的な体験をし、それによって、福音が真実であるという証を得ています。それは少年ジョセフのような劇的な示しではないでしょう。モーセが見た燃



えるしばのようでもないでしょうし、モルモン経の神聖な起源を三人の見証者に証した天使モロナイの現われのようでもなかったと思います。しかし、いずれにせよ改宗者は皆、聖霊が訪れ、証を与えられる時に感ずる、温かく愛に満ちた感情を味わっているのです。

私はこの教会の会員になってすでに6年、その間のほとんどを、指導的な立場の責任で働いてきました。疲れる時もあります。意気消沈する時もあります。挫折感や無力感にとらわれることもあります。

しかしそういう時に思い出すことがあります。7年以上も前のある夜のことで。私はその時、主のみ前にひざまずき、この

教会が現在この地上における真の神の教会であること、また、モルモン経が神から授けられたものであり、ジョセフ・スミスが確かに神の予言者であることを知りました。

その時のことを思い起こすと、同時に自分が交わした誓約、神の偉大さ、神が注いで下さった深い愛が頭に浮かんできます。そして、主が私のために大いなる苦しみを受けられたこと、主が私を心にかけて、日々必要なものをすべて与えて下さったことも思い浮かんできます。

あの夜の時と同じ証を再び受けて、これらのことを本当に思い起こす時、私は元氣を取り戻します。新たな力と知恵が湧き、証が強められます。そして、神の王国をこの地上に築くために、主と共に働いていることに、また思い至るのです。

私たちは末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になる時、バプテスマの水に入り、主とある誓約を交わします。その誓約の中には、主のみ名を受け、主を常に思い、戒めを守ることが含まれています。主は、もし私たちがそうするなら、みたまが常にともにあると約束しておられます。

私たちには皆なすべき業があり、それぞれに使命を与えられています。また果たすべき約束があるのです。誓約を思い起こし、霊的な体験を思い起こしましょう。そして、聖霊を通して与えられた証を思い起こし、機会あるごとに、それを人々に分かち合おうではありませんか。

*ゴドフレド・H・エスグエラ兄弟は公認会計士であり、教会ではカルーカン・フィリピンステーキ部のステーキ部長を務めている。

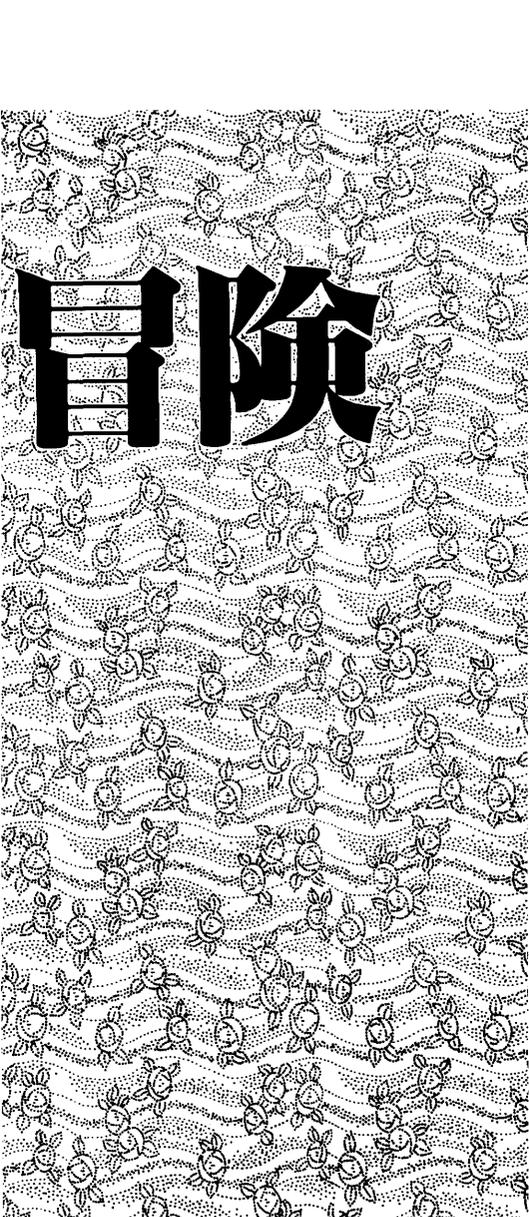
素晴らしい



イレイン・キャンソ

中 央若い女性会長のイレイン・キャンソ姉妹は、人と人との心の触れ合いに精通している人です。著述、編集、話術においても卓越した才能に恵まれた彼女は、読者や聞き手に自分の思いを分かち合う能

力を持っています。以下の記事にはキャンソ姉妹の著作、話、またインタビューなどの内容からの抜粋が含まれています。意思の疎通に関して、キャンソ姉妹の言葉は非常に多くのことを教えてくれることでしょ



冒険

う。

「人生は素晴らしい冒険です。奥の深い体験をして下さい。熱心に取り組んで下さい。そして、それらを日記に書き留めて下さい。様々なことにチャレンジして下さい。」

イレイン・キャンノン姉妹は、自分が語った言葉を実践に移すための方法を知っています。彼女は人に勧めた通りに、自分自身でも豊かな充実した生活を送っています。そしてそれらを日記に書き留めているのです。

彼女の日記には将来への予言的な響きがありました。11歳の時、彼女はこう書いています。「おとなになってユースの責任をすする時に子供の気持ちが理解できるよう、今の自分の気持ちを書いておく。」

キャンノン姉妹の多くの才能の中でも、人の気持ちを理解する能力は特に素晴らしいものです。彼女はほかの人の悲しみ、心配事、苦しみに気づき、理解し、必要な慰めを与える類まれなる才能を持っています。本当に困っていた時に、彼女は何の見返りも求めずに、無私無欲の、愛に満ちた助けをしてくれたと証する人は数多くいます。彼女は困難な問題を抱える多くの若人を自分の家に招き、愛をもって助けを与えてきました。また彼女は人の心の中に隠された心配事を見抜く力を、持っていますが、それは並々ならぬものです。彼女に今与えられている召しには、この愛と洞察力の賜が常に必要とされます。

「私は若い女性をととも愛しています。彼女たちを愛するという点に関して、自分はキリストの代理人であると強く感じています。彼女たちは愛を必要としています。また認められたいと願っています。私には彼女たちが『とにかく、私が何を見、何をし、何を聞いているかに関係なく、私を愛してくれるだけかが欲しいの』と言っているように思えます。もし私が彼女たちに愛を示すことができれば、彼女たちも天父と救い主が自分たちを愛していてくれる



「若い姉妹たちを本当に愛しています。」

ことに疑いを抱かなくなるでしょう。それによって彼女たちは、その信仰に一步近づけることができるのです。」

キャノン姉妹の一番の願いは、教会の若人が救い主を知るようになることです。「キリストを知る必要があります。それは何にも増して大切なことです。ある人はこう言います。『2千年も前の人に、今の時代の、一体何が分かると言うんですか。』それに対する答えは、『すべて』です。イエス・キリストの福音はいつの時代にも当てはまるものです。答えはそこにあります。キリストの教えは実際に力を持つものです。現代の若人の問題一つ一つに答える力を持っているのです。私たちに与えられている最大のチャレンジは、キリストが何と言っているかを知ることです。私は若い人たちに言います。『皆さんは、キリストが実在の御方なのか、また神の御子なのかを自分で知らなければなりません。』実際に進行しているひとつの計画があります。そして、神がそれを導いておられます。このことを知らずに

は、幸福になれません。またそれによって若い男女が重大な誤ちから守られることがよくあります。互いに求め合う前に、まずもっと強く主を愛さなければなりません。

皆さんはどんなことでも、討論によって解決しようとすることができます。でも主に対する真の信仰があるなら、その信仰はお母さんがその場にはいない時や、まったく行き詰まってしまったり、良心を忘れてしまいそうになった時にさえ働きかけてきます。もし主を愛しているなら、きっとこう思うでしょう。『主を傷つけることはできない。主は私を愛し、私のことを心にかけておられるのだから』と。最近私がニューヨークで会ったある少女にとって、それはとても大きな意味を持っていました。彼女は『だれも私のことなんか心配してくれない』と言っていました。私は彼女に、主が心にかけて下さることを理解してもらう務めました。彼女は最も偉大なる御方が心配しておられることを悟ると、たちまち自分自身のことを気にかけるようになりま

した。」

キャノン姉妹は数多くの若い女性や成人指導者に対する責任を持つ役員として、忙しい毎日を送っています。彼女は合衆国婦人評議会と国際婦人評議会の役員を務めています。そしてこれらの責任を果たすためにこれまで何千キロもの道のりを旅しています。

彼女は若い女性の責任で各地の教会を訪問しますが、そういう時に、若い女性たちの目で世界を見つめようとしています。「どこかの国へ行った時、私は青少年がいる所、彼らが時間を過ごしている場所に案内してくれるようお願いすることにしています。彼らが学校や家庭から、どのようにして教会へ行くのか知りたいのです。そして指導者の人にその道案内をお願いします。ドイツのある所で、若い人たちが高校から教会へ行く時にどうしても通らなければならない道を教えてもらいました。その道は、その町の中でも最も悪い環境の所を通っていました。あらゆる種類のポルノグラフィが目に飛び込んでくるのです。私はその時のほんの短いドライブで、若い人々のための道徳的なよろいを強くしなければならぬことを学びました。」

キャノン姉妹の若人たちに対する大きな愛は、一部には彼女自身の豊かで変化に富んだ若い女性としての時代の経験に根差すものです。彼女は自分自身の若かった時の思い出を次のように述べています。

「我が家は人里離れたある山のふもとにありました。若い時分の私にとって、その山は生活のすべての面に影響を及ぼしてい

ました。私の部屋の窓越しにそびえるその山は、何かしら安心感のようなものを私に与えてくれました。岩だらけのその頂上には、家族や教会のグループ、それに子供同士でも登りました。そしてある時、モーセみたいですが、何かどうしても登りたいという気持ちに駆られて、ひとりで山に行きました。神と話をするためです。自分が一体何者であり、これからどういう人生を歩んだらいいか、じっくり考えてみたいと思いました。ちょうど16歳の時でした。私の心はずんでいました。うららかな春の朝、私が登ろうとするその山の頂から、太陽が顔をのぞかせています。

山の上から下界を見下ろすと、そこには朝日を浴びて一日の活動をまさに開始しようとする家や人々が、きらきら輝いて見えました。どれも皆見慣れた景色です。何か自分の体の延長のような感じでした。目を自分の家から友達の家、そして道の突き当たりにある教会、丘の下にある学校、そして隣のお店へと移していき、そして最後にまた自分の家に目が留まりました。そこは傷つきやすい私を温かく受け留め、いろいろなことを教えてくれた場所です。そのことを考えると、心の中に子供の頃のことが走馬灯のようによみがえってきました。

そこには必ずだれかがいて、私に何らかの影響を与えてくれていました。そう、16歳の私は自分ひとりじゃない。両親や学校の友達、お店の人、教会の指導者たちがいたからこそ今の自分があるんだ。そしてひとつのことに気付きました。私はいろいろな人から恩を受けていたのです。よし、

きっとその恩に報いよう。私はそう心に決めました。私は神の力が必要だということを知っていました。そして主に心を向けた時、私の心はすでに主が生きておられるという気持ちで一杯でした。山の頂に座って、自分は世に出て、もっと立派に成長できるんだと考えているちっぽけな自分にも、神は手を差し伸べて下さる、そう思いました。山を下りる時、すべてが美しく見えました。生きていて良かった。」

この山の頂で、キャノン姉妹はもうひとつの発見をしました。文学への愛です。これによって彼女のその後の人生がどれほど豊かなものとなったか分かりません。

「十代の前半でしょうか。ひとりの男の子が私に、ページが破れてぼろぼろになった1冊の詩集をくれたんです。それが私の人生を変えることになりました。『人は五感を越えた所に到達することができる。そうでなければ天は何のためにあるのだろう。』

英国の詩人ロバート・ブラウニングはそう書きました。そしてこの言葉は私自身の言葉となり、ひとつの理想として私の自我の目覚めとなったのです。

この同じ少年は、ウィリアム・シェークスピアやウィリアム・ワーズワース、ヘンリー・ワーズワース・ロングフェロー、それにジェオフリー・チャーサーの作品を取めた、すり切れた皮の表紙の本を何冊か貸してくれました。彼は手あたり次第に何でも吸収しようという心の持ち主でした。また公立の図書館からは、当時ではあまりなじみのない、不格好で安っぽく、ページをめくるのが大変な新しい製本の本を借りま

した。チャールズ・ディケンズやロバート・ルイス・ステューブソン、それにラルフ・ウォルドー・エマソンのエッセイ『友情』などが取められていました。

私はこうした本をむさぼり読みました。本を貸してくれたその少年も私も、もちろん読んだことを皆理解できたわけではありません。でも理解しようと努力することが楽しいのです。いつの日か潮の流れのように、分からなかったことが皆見えてくるのです。小説の世界に身を横たえ、読み終えたら今度は自分の言葉で相手に何が書いてあったか話す、そのようにして短い夏は過ぎてゆきました。そしてそれが、私たちの一生の関係の基盤を築くことになったのです。」

キャノン姉妹は、このような知的成長の過程にあって、霊的にも成熟の度を増していきました。

「春の終わり頃、私は祝福師の祝福を受けました。季節もちょうど良かったですし、私自身、受けたという気持ちがありました。それで、天のお父様が私のために何を用意して下さっているのか、一生懸命準備をして聞こうと考えました。もちろん悔い改めなければならないこともありましたし、断食と祈りもしました。そして両親や特別なひとりのボーイフレンドと、祝福師の祝福の意味について熱心に語り合いました。祝福師のジョーンズ兄弟との約束の前の晩のことをよく覚えています。私はもっと天のお父様に近づかなければならないと思いました。そして外に出てたずみながら、コオロギの美しい鳴き声に耳を傾けました。



母であるウィンフレッド・アンダーソン姉妹と

自分はおとなになったんだなあ。そう思いました。そしてその時です。夜空に瞬く星に手招きされているような感じがしました。感情のおもむくままに、私はちくちくする草の上にあお向けになりました。子供の頃よくそうしたものでした。そしてひとつ伸びをして、空に目をやりました。不思議な経験をしたのはその時です。自分の心が地上から離れて、どんどん宇宙に吸い込まれていくのです。神様のみそばに来たんだ。そう思うと、胸が高鳴りました。そう、私の祈りが天に届いたのです。私は、神が生きておられることをみたまを通して知りました。涙が込み上げてきて、止まりませんでした。」

思春期にあったキャノン姉妹にとって、両親の存在も大きな力でした。

「父は愛の深い人です。私がすることは何でも素晴らしいと考えてくれました。ひとりの少女にとってそれがどんなに自信につながったか、想像してみてください。すべて愛に満ちた生活でした。父は見ず知らず

の人にも愛を示しました。そんな父でしたから、天のお父様も父のような人ではないだろうかと思うようになりました。そうすると、祈りも親しみの込められたものとなります。

父は祈る時、通りに住む全部の家族の名前をあげて、祝福を願いました。また時々、難しい言葉を使うので意味の分からないことがありました。

ある晩父が祈っている時、私は神様から罰が下るのを覚悟で、祈っている父の顔に目をやりました。びっくりしました。泣いていたのです。こちこちの固い言葉を使って祈る父も、心は思いやりで一杯でした。涙がその証拠です。

母は教会のことを一生懸命やりました。いつも献身的で自分をよく制し、みたまの導きに従って行動する人です。母はふたつの言葉をよく使いました。『義務』と『従順』です。また彼女は気転のきく人で、物知りでもありました。『辞書を見てみましょう』『百科辞典を持ってくるわ』『聖典に何て書



スパンサー・W・キンボール大管長と共に

いてあるかしら』これが母の口癖でした。

私も御多分にもれず、教会が真実であることを知るために祈らなければなりませんでした。この知識は、母が信じていたものの押し付けではありません。それどころか、私は母の教えによって危機を脱したことが何度もありました。若い頃の私は情熱的でしたが、母はそんな私に、きちんとけじめのある生活をするように教えてくれました。そのことを感謝しています。自分の気持ちをコントロールして後にきちんと自立した生活を送る方が、ひどい罪と心の痛手にさいなまされるよりずっとよいと思うからです。

今思うと、家庭でこの優しさと福音をしっかり守る態度とが両方とも強調されていたことは、本当に良かったと思います。そしてそのふたつの面は、両親の人生から私たちが模範として自然に学び取ったものでした。」

結婚生活に入ったキャノン姉妹の愛というものは、子供の頃に家庭で味わったと同

じ愛でした。

「母は、正しいことをすれば必ず結果になって現れると教えてくれました。父は私を愛してくれました。そして夫のジムによって自分自身をさらに価値ある存在として見られるようになりました。今あるのは夫の助けがあったからです。こんな夫に恵まれて、本当に幸福だと思っています。彼は私にとって祝福です。私は教会では指導者ですが、家では彼が指導します。素晴らしいと思います。」

文筆の才に恵まれたキャノン姉妹は、人生の移ろいを季節に例えてこう書いています。

「冬は冬至と共にやって来るのだろうか。それとも初雪と共に。そうではない。冬は季節を問わず、傷ついた心にやって来る。そしてその心の傷は、人と人との交わりの中で生じることがしばしばだ。」

イレインの冬はまだ子供の頃にやって来ました。

「私は母の勧めで、朗読の先生に付いて



訓練を受けていました。父が良い仕事に恵まれていたお陰で、そうした訓練を受けることができたのです。その頃、またとない機会が巡ってきました。学校祭の一貫として、6年生の中からだれかひとりが、テンプルスクウェアのタバナクルで話をしなければならないのです。私は当然のことながら、選ばれるとしたら自分しかないと思っていました。」

でも、結果は違っていました。イレインは失望しました。もちろん当時のイレインには、将来タバナクルの説教壇で話をすることとどまらず、その声が全世界に放送されるなどということは想像もできなかったでしょう。でも、そうした将来について何も知らなかった彼女が、どうやって失意に打ち勝ったのでしょうか。

「ええ、初めは『一生懸命練習しても全然効果がなかった。みんな自分の好きな人を選ぶのよね』と考えました。でも、その気持ちは克服できました。私は決して神様のことを忘れたことがなかったので、祈りの中で天のお父様にこう尋ねました。『なぜですか。練習が足りなかったのですか。どこが悪かったのでしょうか。』」

こうして彼女は、自分の思いのすべてを御父に打ち明け、答えを受ける術を身につけていきました。

学生時代の数々の経験を通して、キャンオン姉妹は正しい目的を持つことの大切さを学びました。地位や名声や権力を得ようとする、自分が心から求めている究極的なものから次第にそれていくのです。そして、初めは夢想だにできなかった素晴らしい場

所に到達できるはずなのに、それもできなくなってしまうのです。

「私が学んだのは次のことです。与えられたことを、他の事柄に気を取られずとにかく一生懸命行なう。そうすると、それが後の経験への備えとなる、ということですよ。」

彼女は、心の痛手は奉仕によっても癒^{いや}すことができることを知りました。

「私は高校の時に、女子学生協会の会長に立候補しましたが、落選してしまいました。何か、すべてを失ったような気持ちでした。できただれもない所に行きたい、そう思いました。でもそうした気持ちを押しつけて、私は担任の教師と共に、当選した人のための盛大なパーティーを計画したのです。

負けて傷つくこともあるでしょう。その時は人のために働くことです。だれかがいやなことをしたり、自分で欲しいと思っていた賞や仕事を人に取られたりした時は、だれかの所に行って『私に何かできることがないでしょうか』と言って下さい。他の人に手を差し述べることによって、心の傷から遠ざかるのです。」

キャンオン姉妹は自分の成長を計る尺度をひとつ紹介してくれました。それは、「自分は今、キリストのようになろうとしているだろうか」という言葉です。

キャンオン姉妹は長年にわたる敬虔を土台に、今、若い女性の相談相手として活躍しています。若い女性の年代の人々が彼女の話に耳を傾けるのは、彼女なら悩みを分かってくれるし、助けてくれると信じている

からです。

教会の若人の皆さん一人一人に分かっていただきたいのは、たとえ世界的な業績を残したとしても、主のみたまがなかったらそれは無に等しいということです。私は今、みたまの導きにもっと敏感になることを望んでいます。すべてはみたまを受けているか否かで決まります。私はこのみたまの働きによって偉大な奇跡が起きるのを、この目で見てきました。」

妻として、母として、祖母として、そして末日聖徒イエス・キリスト教会の中央若い女性会長として、イレイン・キャンノン姉妹は今過去の経験とみたまの導きを元に、最善を尽くそうと努力しています。彼女は、私たちの前に永遠の未来が開けていて、それに備えなければならないことを知っています。そして今、与えられた務めの中で、神の国の義を第一に求めてたゆまず努力しているのです。このような彼女に、残りのものは後にすべて添えて与えられるでしょう。

「あなたはバプテスマの水を出た後、しばらくは純粋無垢な聖徒として過ごすことができるでしょう。両親の教えにも、しばしの間素直に従うことができるでしょう。家庭で、またセミナーやインスティテュート、日曜学校で、聖句を暗唱することもできるでしょう。また、教会で祈りの環に加わり、主への敬虔の念を感じることもしばしばあるでしょう。またダビデのような偉大な人物の話聞き、主のみ力に驚くこ

ともあるでしょう。これらはすべて素晴らしき経験です。しばらくは。

そして突然、現実の生活があなたを襲うのです。現実の海の真ただ中に放り出されたあなたは、自分自身で考えなければなりません。決心や行動の一つ一つを予言者や親に頼ることができないのです。大きな誘惑に遭っていても、主は何もなさらないでしょう。人生は試しの時なのですから。ダビデの最初のチャレンジは、相手が体が大きいということだけでした。でも、あなたの本当の敵は、あなたよりも低い考えを抱いている、あなたの親友であるかもしれません。そして、悪意がなければよいという考え方が自分との闘いには決して勝利を取ることがないことが分かるでしょう。つまり、自分でなすべきことについて、その責任を他の人に転嫁することはできないのです。

皆さんは神の娘です。神の家族です。家族であるということは、家族として同じことをする、すなわち家族の標準に従って生活することを意味します。もちろんこの天の家族の中であって、成長につきものの悩みや心の痛みを経験することもあるでしょう。でもこの家族の長である天のお父様は、その大いなる知恵と全能の知識をもって私たち一人一人を心から愛して下さるのです。御父は、いつの日か私たちがみもとに帰るのを待っておられます。それも、人生を立派に過ごして帰ってくることを望んでおられるのです。

☆特集2



教会での子供たち

スベンサー・W・キンボール大管長は、次のように述べています。「末日聖徒は、地上で最も敬虔な民と言えるでしょう。

では敬虔さはどこで養い、どのように高めたらよいのでしょうか。家庭が、神にふさわしいあらゆる徳を養う絶好の場所であるように、敬虔さもまた、家庭において養われます。

そして、家庭で学んだ事柄が、教会の集会での行動に現われるのです。家庭で祈るようになった子供は、礼拝行事の祈りの時は、じっとして静かにしていなければならぬと、すぐに分かるようになるでしょう。

同様に、家庭の夕べが家族の生活の一部

になっていると、子供たちは教会だけでなく家庭でも天父について学び、敬虔にしなければならぬ時があることを知るようになります。

幼い子供のいる両親は、子供に集会の大切さを悟らせ、騒がせないようにするのに大変な時もあるでしょう。これを上手に行なうには、家庭での忍耐、毅然とした態度、準備が非常に大切な要素となります。」「敬虔な民」 pp. 2-3)

次に紹介するのは、子供と出席する教会の集会を実りある敬虔な時間にするために、両親たちが提示したアイデアの数例です。



眠っている子供、 泣いている子供

●小さな子供たちが教会の中で
楽しく過ごせるように助ける

ジョイス・ウィリアムズ

主は言われました。「幼な子らをそのま
まにしておきなさい。わたしのとこ
ろに来るのをとめてはならない。天国はこ
のような者の国である。」(マタイ19:14)

同様にごく最近では末日聖徒も、すべて
の年齢の子供は両親と共に聖餐会に出席し、
家族と一緒に座るべきであると教えられて
います。こうすることにより、集会を霊的
なものにする上で問題が幾つか出てきます。
例えば、子供が泣き出したり騒いだりしま
す。ひとりの大人が何人かの子供の面倒を
見なければならなかったり、近くに他の子
供が座ったりします。また、両親が子供の
扱い方を知らないという場合もあります。
そのような時に問題が起こるのです。

確かに他の人のことや集会の目的を考え
ると、騒いでいる子供がおとなしくなるま
で、休憩室や子供のために設けてある隣の
部屋に連れて行くように言われることがよ
くあります。けれども親たちの多くは子供
を静かにさせ、集会を子供にとって楽しい
ものにするよう助けてさえいます。小さな
子供たちには、休憩室はしばしば単なるこ
らしめでしかありませんが、少し大きい子

供にとっては訓練の場であり、親子がお互
いに理解し合う場となります。

固い椅子に足をきちんとそろえて腰かけ
ている姿や、足が床に届かなくて椅子から
だらりとぶらつかせている姿を想像してみ
て下さい。隣に座っているのは自分の大好
きな人なのに、もじもじ動き出したりおし
ゃべりしたりでもしなければ、話しかけて
くれないし、あなたの方に目をくれようと
もしません。近くにはあなたの親友が座っ
ています。でもあなたは天のお父様が敬虔
になることを望んでおられると教えられて
いるので、友達と話したり遊んだりするこ
ともできません。しかも敬虔というあいま
いな概念は、これから先何年かたたないと
本当の意味を理解できないかもしれないの
です。じっと座って話に耳を傾けても、興
味をひくのは讚美歌ぐらいのものです。だ
れが話しているか見ようとしても、前の人
の頭越しではそれもかかないません。時計の
針はなかなか進まないし、あなたは退屈だ
けどちっとも眠くありません。そんなだか
ら、あなたは心底、家まで走って帰りたい
くなるのです。

小さな末日聖徒は普通の子供と変わりません。彼らが教会でやっていることは、成長と進歩の過程において正常なことです。エール大学では、様々な年齢で子供が表わす多くの特徴についての調査がなされました。(See Arnold Gesell and Frances I lg, *Infant and Child in the Culture of Today*, New York : Harper and Brothers) 1歳の子供は活動が好きです。動き回ったり、引っ張ったり、床をはい回ったり、物を床の上に投げてまたそれを取りに行ったりします。15カ月の子供は探検したり、本のページをめくったり、周りの物の動きを観察したりするのが好きです。18カ月になると、よじ登ることが彼らの好きな活動になります。また讚美歌など、本のページを破ったりします。何にでも興味を示し、首を突っ込みたがる時期です。この時期の子供たちがかんしゃくを起こすのは、自分の意思と、その意思が他の人に与える影響を発見したからなのです。2歳では、子供たちは覚えたての言葉を、いつも柔らかな調子でとは限りませんが、練習し出すようになります。また特に父親を好み、(父親が皆の前で立って話をしようとして)父親と一緒にいたがるようになります。また遊んでいる間中ずっとおしゃべりを続けていようとします。3歳になると、子供たちは親の言葉によく応えるようになり、また何か物を与えられたらそれで1時間近く遊ぶことができます。4歳児はさらに自分ひとりで遊ぶことを覚えますが、毎日400にも上る質問をします。4歳の子供は聖餐会で席に着いてはいるでしょうが、行なわれていることに対しては依然として興味を

示しません。

以上の発育上の事実から、私たちはとても元気が良く、行動的で、好奇心の強い小さな聖徒たちの姿を思い浮かべることができます。このように、子供たちが正常であることは慰めとなるべきであって、心配しなければならないものではありません。就学前の時期に子供たちはこの人生において最も重要なこと、つまり歩くこと、意思を伝え合うこと、そして人間関係など、生きるための技術を身につけます。また天父や教会や家族や友達に対して、生涯にわたって保ち続ける感情や態度や意見を育てる時期です。ですから子供たちの成長に必要な物事を軽んじたり、教会で否定的な態度を見せたりすべきではありません。私たちは子供の発育段階を生かし、教会の活動に参加するというチャレンジに対処していく時に、それぞれに合った方法で根気強く助けあげるべきです。

赤ちゃん、つまり乳児は集会の進行には関心がありません。両親は哺乳びんや赤ちゃんの毛布や音の出ないおもちゃなどを利用して、子供たちを快適にし、気持ちよく過ごさせてあげるよう気を配るべきです。むずかかって周りに迷惑をかける時は、無理して礼拝堂にいても、彼らぐらいの年齢では人格を形成したり正しい習慣を身につけたりできるわけではありませんから、休憩室や子供のために設けられた教室に連れて行って落ち着かせることです。

よちよち歩きの幼児や未就学児は、周囲を意識するようになります。いつも身の周りが快適であることだけでは十分ではありません。彼らは遊び相手を欲しがり、また

動き回りたがります。未就学児はまだ幼くして集会の意味を理解することができないので、次の方法を用いることができます。

1. 大人が一对一で敬虔にできるように助ける。父親、母親、兄や姉、その他の十代の子供、またはワード部内の年配の教会員や独身の教会員は、特に子供たちがなついている場合、良い助けを与えることができます。助けの必要な両親は遠慮なく助けを求めべきです。ワード部の会員で未就学児のいない人が、明らかに助けを必要としている人に協力を申し出ることができるでしょう。

2. コミュニケーションが必要。子供たちは70分間おしゃべりしないでがまんしていることはできないので、ひそひそ声で話すことを教える必要があります。また集会中子供たちにいつも目くばせをし、抱きしめ、ほほえみかけ、体を軽くたたいてあげることが必要です。

3. 子供たちの興味を引く、音の出ないおもちゃを与える。木や金属でできたおもちゃよりもクワイエットブックやスポンジブロックなどが良いでしょう。教会に置いてあるおもちゃはさらに効果的に使えます。

4. 子供たちを寝つかせるものを準備する。小さな毛布、枕、または子供の緊張が和らぐなら柔らかいおもちゃや哺乳びんが良いでしょう。眠っている子供は、はい回ったり、飛びはねたり、泣いたりしている子供よりずっと扱いやすいものです。

5. 集会の様子が見えるようにする。ひざの上に座らせると子供はよく見えます。また子供を友達から離れた所に座らせることによって、注意が散漫になるのが避けら

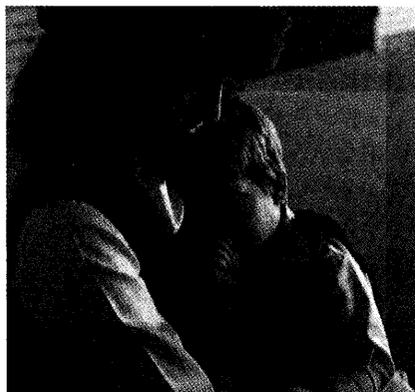
れます。列の端や礼拝堂の後ろの方に座ると、必要な時にすぐに出ることができます。

6. どんな小さなことでも、良くなつたらほめる。これは教会から帰ってきて家で行なうのが一番良いでしょう。しかし敬虔さをそこなわなければ、その場でほめても構いません。聖餐式の間静かにしていることができれば、子供の年齢が上になるに従って、両親は静かにしている時間を延ばすことができるでしょう。大切なことは一度に多くのことを期待し過ぎないことです。3歳になるまでは、70分の集会の大部分を自分でおとなしくしていることはできません。3歳を過ぎて子供に関心を向けることが必要な日が時々あるでしょう。

7. 必要な時に速やかに礼拝堂を出る。明らかに集会を妨げる子供は礼拝堂の外に連れ出すことが一番良い方法です。しかし、機嫌を悪くした子供を連れて外へ出る時は、自分がどんなに困って失望しているかよりも、子供がどう感じているかを考えて下さい。恐れや罰を加えることは、子供を支え励ますことから比べたらあまり助けにはなりません。礼拝堂に戻る時にいい子にすると約束させれば、おどかしたり、ぶつたりするよりはもっと上手に行儀よくさせることができるでしょう。

どんな小さな子供でも教会で楽しく過ごすことができます。子供たちはかなり小さな時から教会へ行くことの楽しさを学び、その過程で敬虔になることを学ぶことができます。

*ジョイス・ウィリアムズ姉妹は、小児発達学の元教授で5児の母親、タラハシー・フロリダワード部日曜学校教師。



私の子供はふたりだけですが、集会中のすったもんだは12人家族のお母さんにも匹敵するものです。

毎週日曜日、私は教会員でない夫を残して集会に出席しますが、聖餐会中には少なくとも1回、多い時では何回も外へ出なければなりません。大声を上げてもがいているふたりの子供を両腕にかかえて廊下を歩く度に、私はいつも同じことを考えていました。「どうしてこんな風に外へ出なきゃならないの。この子たちったら私に何のうらみがあるというのかしら。じゃまして欲しくないの。私には勉強することがたくさんあるのよ！」

廊下に出ると子供たちをひどく叱り、悲しい気持ちを押し隠して、おとなしくすることを強要します。私はちっとも幸福ではありませんでした。そして子供たちもそうでした。

その時私はこう考え始めました。もし隣に救い主がいらっしゃったら私はあんな風にはしなかったわ。イエス様ならこんな時にどうなさるのかしら。多分子子供たちをご自身の足元で静かに遊ばせておやりになり、

また廊下!

リンド・アルダーマン

子供たちの注意を好きな方にお向けになるわ。そしてきつと小声で今何をしているか説明なさるでしょう。子供たちを騒がせず、その愛に満ちた優しい声で静かにさせるのよ。イエス様は子供たちが快適で楽しそうか気を配られて、疲れたら眠らせておやりになるでしょう。でもそれでいて甘やかすことはなさらないわ。

この見方は子供たちに対する否定的な思いを打ち消す助けとなりました。そしてこのことに感謝しました。けれども聖餐会のお話を聞きたいという私の個人的な願いは依然として変わらず、何かを聞き逃す度にその思いが私をむしばんでいくのです。

ある日曜日のこと、とうとうそれが頂点に達しました。聖餐会が始まって5分たった時、2歳の子供がぐずぐず泣き出したのです。間もなくそれは我慢できないものになりました。すると案の定、下の子も泣き出しました。私はすぐにふたりを外へ連れ出しました。ある人は迷惑そうに、ある人は理解を示して私たちを見ていました。私は屈辱的な気持ちで荷物をまとめて廊下に移りました。敗北感で一杯でした。やるせない気持ちで胃の具合まで悪くなりました。

私は礼拝堂を出てから2歳になる娘に、自分がどんなに腹を立てているか、また教

会で教えられていることを私がどんなに今学ばなければならないかを話しました。愛情を込めてかつ厳しい調子で、私は彼女を押さえつけて静かにさせました。でも子供が言うことを聞いてようやく落ち着いた後でさえ、話をしている人の言葉は耳に入りませんでした。何も得るものがなく、「何の役に立つのだろう」と考えていました。

その時、知恵の種が私の心の中にまかれました。子供たちの横に座り、聞こえてくる意味もわからない声に上の空で耳を傾けていると、聖霊が聖餐会でも聞いたことのないような話をして下さいました。

「あなたの努力は顧みられていないのではありません。十分に認められています。なぜならあなたは子供に正しい姿勢と振る

舞いを教えるために、聖餐会で受ける教えを幾つかあきらめなければならないからです。子供が静かにしているほんの少しの時間、あなたには普段よりもずっと大きな学ぶ力が与えられます。よく考えることにより、あなたが聞き逃した知識だけでなくそれ以上のものが与えられるのです。」

それ以上のもの……。私はその時、子供を育てることを通して受けた訓練と学びは、犠牲にして足るべきものだったことを悟りました。心の重荷は軽くされ、崇高な天父のみ旨を理解したという気持ちで一杯でした。感謝と喜びに満たされたのです。

*リンダ・ダーリン・ケイン・アルダーマン姉妹、3児の母親、カナブ・ユタワード部初級初等協会音楽指揮者。



子供が話を聞く 助けをする

リンダ・リー・ハンディ

っていました。私たちの目的は聖餐会の間子供たちを静かにさせておくことだったのです。

しかし、子供たちが大きくなって小学校に入る頃になると、私たちは新しい段階に進むことを考えました。私たちの側でもう少し努力することによって、子供たちが教会の集会を新しい見方で見ようになり、

子供たちがかなり小さい時期は、私たちはいつもすぐに席を立てるような場所を選んで座りました。おむつの入ったかばんは、いつも活発で生き生きしている連中を静かにさせるための本や、クレヨンや、音の出ないおもちゃなどがいっぱい入

そこで受けるメッセージによって成長できるのではないだろうか、と考えたのです。ですから、私たちの新しい目的は、子供たちが教会の集会でお話を聞いて何かを学ぶのを助けるというものに変わりました。

最初に私たちは、これから何をするのか、またなぜそうするのかを家族で話し合いました。それから「使用中止期間」を決めて実行しました。その期間は上の3人の子供に、もう遊び道具は持っていないで話を聞くように言いました。

この期間私たちはいろいろと深く考えてみました。そして家庭を霊的なことを学ぶ中心地としなければならないことを今までに強く感じたのです。教会で教えられている福音の概念は家族で話し合うための踏み台であるべきです。家庭で学んだ原則は教会で補強され、より豊かなものになるのです。このようにして、私たちの期待通り子供たちは聖餐会をより敬虔なものとして受け入れるでしょう。

また子供たちが、話を聞く力を養えるよう助けることに焦点を合わせる必要があることも学びました。そのためにどうすれば良いかということについて、私たちの経験から得たことを次に挙げておきます。

1. 話を聞くことの大切さと話の聞き方について、家庭の夕べでレッスンを行なって下さい。最初に一对一の会話の時はお互いにどのように相手の話を聞くかについて話し合ってみましょう。またその状況をロールプレイングで行なってみて下さい。その週は子供たちと共に良い聞き手となるよう努めて下さい。話し手は聞き手の目を見ながら話すこと、聞き手は話し手に神経を

集中させることが大切であるということを教えてください。

2. その他特別に話を聞く場を家庭で設けて下さい。私たちは家庭の夕べの中で、子供たちが聖典の中から話をする所や、福音について教えている所をテープに録音しています。子供たちはテープで自分の声を聞くのが大好きで、何度も聞き返しています。子供たちに本を読んであげることも優れた方法です。後で使えるように好きな部分を録音しておくことも、我が家ではよく行なっています。テープは楽しむためにはもちろんのこと、正しい原則を教えるためにも使うことができます。

3. これらの良い話の聞き方の技術は、特に聖餐会など大勢で話を聞く時にどのように応用できるかを家族で話し合ってください。どの現職教師養成レッスンでも教えているように、目と目を合わせて話す方法は、大勢の人に話す場合にも用いることができます。聖餐会では話し手の方を見つめ、きょうきょうしたり他のことを考えたりしないで、子供たちに良い聞き手の模範を示して下さい。

4. 家庭では、教会用語について深く広い知識が持てるよう教えてください。そうすることによって、話の中で教会用語が出てきた時、話を効果的に理解することができます。教会の集会の中で話される言葉の多くは、小さな子供にも理解できる範囲にあります。最初はバプテスマ、戒め、聖餐などの言葉から始めて下さい。

5. 教会の集会の目的や出来事を理解できるように子供たちを助けてあげて下さい。家庭の夕べで祝福や確認の儀式や聖餐など、

★特集2 / 教会での子供たち

大切な事柄について話し合しましょう。そうすることによって集会の一部を成すこうした事柄についてもっと親しみがわき、興味も出てくるでしょう。

6. 子供にひとつずつ話を割り当て、家に帰ってその内容を復唱させて下さい。また集会中に話の要約を短い文章で記録するようにさせて下さい。話が難し過ぎる時は、両親や兄弟が説明したり概念を教えたりして助けることができるでしょう。この方法は家族全員が協力し、全員が益を得ることができます。

7. 教会の集会で聞いた興味深い話や概念を、家族のファイルやスクラップブックにまとめましょう。見出しは簡潔にし、一番小さな子供にも考えを出させて下さい。子供に自分たちのアイデアやもらってきた

チラシなどを使わせて下さい。家庭の夕べのレッスンで、ひとりの子供がそれらのお話の中のひとつを割り当てられた時、資料のファイルを見返すように言って下さい。

8. 子供たちが聖餐会での音楽にもっと興味を持てるように、家族で讃美歌を歌いましょう。音楽指揮者に聖餐会で予定されている讃美歌のリストを作ってもらい、家庭の夕べで練習して下さい。子供たちに特に歌詞に注意するよう教えて下さい。そして讃美歌の持つメッセージについて話し合ってみましょう。

私たち両親が努力し時間を費やすならば、子供たちは教会の集会に対してかなりの程度まで理解できるようになります。また話の聞き方を身につけた子供たちは、永遠の祝福を受けたことになるのです。



私が前に訪問したことのある礼拝堂の後部座席には、白と黒のきれいな札が下がっていて、それに「子供と母親の指定席」と刻まれていました。

私は笑ってその札の横を通り越しました。

子供たちと前列 に座ってみました

リンダ・バックストン・グリアー

私はこれまで多くの集会を私の4人の子供と一緒に出席してきましたが、それは後ろの席ではありませんでした。私たちの家族は礼拝堂の前列に席を占めていたのです。確かに小さな子供のいる両親の伝統的な座席は礼拝堂の後ろの方か最後列でした。また多くの人々はこのように決められている

ことが好都合だと考えてきました。後ろの座席に座ることによって、ぐずり出した子供を外へ連れ出す時に周りにかかる迷惑を最少限に食い止めることができるということなのでしょう。しかし私たちにとって、自分の子供や同じくらいの年齢の子供と一緒に前列に座ることが、幾つか重要な利点につながることに気づきました。その内の幾つかをご紹介します。

1. 子供たちは集会の進行を見ることができる。礼拝堂の後ろの座席に座ったのは、ただ讚美歌をしまう木箱か、せいぜい人の頭が見えるだけです。子供はいつも何かを知りたいと思っているので、聖餐会の話聞くのをやめて他にすることはないか探し始めるでしょう。

我が家の子供たちは、その日の歌や話の責任がだれに割り当てられているか、楽しみにしているようです。ある時など、4歳になる息子が私を見上げて言いました。「ママ、あのお姉さんきれいだね。」

私は言いました。「あら、そう。どうしてそう思ったの。」

「だってぼくの方を見て笑ったもん。」その日、私は息子から素晴らしい洞察力を与えられたような気がしました。こんなに美しい瞬間が、後ろの方で起こり得たでしょうか。

2. 子供たちは参加するようになれる。子供たちは成長するにつれて証を述べることやお話をすることの大切さを理解するようになります。そして前列からお話をしに説教壇に向かうのはずっと簡単で、勇気も少なくすみます。しかも彼らにとって最も心強いことは、説教壇から前列を見下ろ

すと、愛し支えになってくれる両親や熱心な賞賛の気持ちを込めて見ていてくれる兄弟の顔が見えることです。また聖餐のパンと水を間近に見るという特権もあり、男の子たちは深い印象を受けることが容易になります。

3. 子供たちは敬虔さを学ぶことができます。前列に座っていると私たちは礼拝堂の後ろの方で何が起きているか見えません。我が家の子供は、他の子供が水を飲むためやお手洗いに行くために出入りするのが見えないので、同じことをする権利を要求したりしません。

4. 両親は子供たちを正しく教えることができます。子供たちは前列に座ることにより、より聖餐会を身近なものに感じ、退屈でつまらないものだとは考えないように思います。私たちは彼らに、聖餐会は主が私たちに下さる勧告に耳を傾ける時間だということを感じてほしいと思っています。子供たちは音楽や発表や指示やお祈りなどを見ながら、聖餐会がどのような構成になっているかを理解することができます。また小さい時から、お祈りの時は頭を下げ腕を組むように教えられます。そして前列に座れば、目をつむらないでいても、監督や副監督の良い模範が目に入ってきます。

もちろん子供たちが実際に前列できちんと座ってられるようになるためには、聖餐会で何が行なわれているかが分かり、両親とそれについて話し合えるくらいの年齢になっていなければなりません。経験からですが、幼稚園くらいの年齢になったらもう可能ではないかと思えます。

前列に座るには、準備が必要です。家庭

の夕べで、敬虔な態度についてロールプレイングを行なってみましょう。そして敬虔さとは何か、なぜ敬虔になることが大切なのか話し合ってみましょう。また聖餐とは何か、聖餐式の間はなぜ特にイエス・キリストについて考えなければならないかを説明して下さい。

また日曜日には、教会に行く準備を楽しんでできるようにしましょう。ぎりぎりまで準備に追われ、車に飛び乗り、教会に時間すれすれに着くようなことは避けて下さい。息せき切っていたのでは、子供たちは動揺して協調心や敬虔な気持ちは失われて

しまうこととなります。

ひと休みする時間のゆとりをみて、教会に着くようにして下さい。そして始まる前の何分かに、水を飲んだりお手洗いにいったりする時間を取って下さい。もし聖餐会が別の集会の後にあるなら、その合い間に子供たちに新鮮な空気を吸わせたり、少し散歩したり、食べ物や飲み物を与えたりするようにして下さい。聖餐会が始まるまでに、できるだけみんなが気持ちよく過ごせるようにするべきです。

教会の用事は、礼拝堂以外の所で済ませて下さい。いったん礼拝堂に入ったら、他の人と雑談するのは避けましょう。そして良い模範となるように敬虔な態度をとって下さい。

それでは前列に座ることで問題がすべて解決できたでしょうか。そうではありません。赤ちゃんを外へ連れ出さなければならぬ時や、子供たちがはしゃぎ回って手のつけられないような時もよくあります。でもそうした問題は少なくなっていますし、子供たちは良い習慣を幾つか身につけたように思います。9歳の娘は大切なことはメモしておいて、それをしばしば日記に書いています。2番目の娘と息子たちは、話者の話を聞くことを覚えました。私たちは彼らも、一番上の娘にならって同じ習慣を身につけるようになることを期待しています。

前列に座って今までよりもほんのちょっと努力しただけで、子供たちはそれだけのことができるようになるのです。

*リンダ・パックストン・グリアー姉妹、6児の母親、ユタ州プロボ在往、ワード部初等協会教師。





小さな お友 だちへ

しちじゅうにんだいいちていいんかいかいいん
七十人第一定員会会員の、ローレン・
シー・ダン^{ちよう}長ろうに、ジャネット・ピー
ターソン^{しまい}姉妹がインタビューしました。

わ たしは、ユタ州^{しゆう}のトゥ
エラ^うで生まれて育ちま
した。わたしの父^{ちち}は、新聞社^{しんぶんしや}につ
とめていました。わかいころ、わ
たしは新聞社^{しんぶんしや}ではたらきました。
いえ^{うし}家の牛^{うし}のせわをしたりもしました。
なつ夏^{なつ}のあいだは、兄^{あに}のジョエルと一
しょに近所^{きんじよ}の家の牛^{うし}を集めたり、
まち^{まち}はずれの草地^{くさち}につれていたり
もしました。はたらいてお金^{かね}をも
らったのは、それがはじめてでし
た。それからしばらく後^{のち}には、町^{まち}
はずれにあるわたしの家の農場^{いえのうじよう}で
はたらきました。わたしたちはも
う十代^{じゅうだい}でしたから、父^{ちち}は、次^{つぎ}から

つぎ次^{つぎ}へと仕事^{しごと}をくれました。

ある日のこと、わたしたちがし
でかした失敗^{しつぱい}のリスト^もを持って、
きんじよ近所^{きんじよ}の人が父^{ちち}の所^{ところ}へやってきました。
その人^{ひと}がリスト^よを読みおえ
ると、父^{ちち}はいすにもたれかかりなが
らいました。「あなたは、わか
っておられないようです。わたし
は牛^{うし}ではなくて、むすこを育てて
いるんですよ。」

ダン^{ちよう}長ろうが6カ月の時^{げつとき}、ダン
長ろう^{ちよう}の家^{いえ}では、ブルドッグ^{いぬ}をか
うようになりました。ダン^{ちよう}長ろう
は、犬^{いぬ}やうまが大きいでした。

ダン^{ちようろう}長老^{ちようろう}は8さいの時^{とき}、スモー

キーという名前のウマをもらいました。「わたしは、11キロもうまにのって家に帰らなければなりませんでした。たいへんでした。そんなに長いあいだうまにのるのは、はじめてだったからです。」

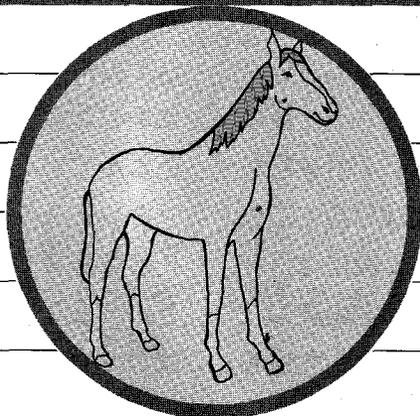
ダン長ろうがまだ小さかったころ、ダン長ろうのお父さんはステーク部長でした。ダン長ろうは、あちこちのワード部や支部に行くのがすきでした。「わたしたちは、会員のみなさんにとてもよくしていただきました。会員のかたたちは、よくいろいろな食物をじゅんぴしていただきました。本当に親切で、あたたかい人たちでした。」

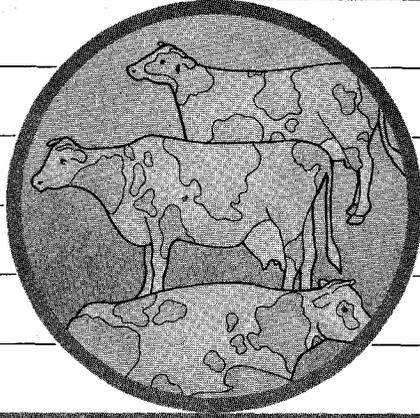
「母は、学校の先生をしていま

した。母はいろいろなことをよく知っていました。そして、家事のほかにも、市のいろいろな活動にさんかしていました。家族や家庭は何よりも大切です。しかし、市の活動にさんかすることもとても大切なことだと母は教えてくれました。

何かを決める時には、父も母も神さまにおいのりしました。家族のいのりは、食べることやのむことと同じように、生活の一部になっていました。わたしは子どものころから、神さまがおられることと、神さまにみちびきをもとめられることを知っていました。

家の中は、しんこうでみちみち





ていました。父は、れいてきな^{ちち}大^{おお}きな^{ちから}力^もを持っていました。だれか^{ちち}が^{もんだい}問題^{とき}をかかえてしまった時^{とき}、わたしたちは父^{ちち}のところへ行く^いことが^{ちち}できました。すると父^{ちち}は、その^{かんが}ことについてよく^{ちち}考^{ごた}え、い^{ちち}の^{ちち}つて^{ちち}くれる^{ちち}のでした。父^{ちち}の^{ちち}答^{かん}えには、^{ちち}いつ^{ちち}も^{ちち}れ^{ちち}いて^{ちち}きな^{ちち}力^{かん}を感じ^{ちち}る^{ちち}ことが^{ちち}できました。」

ダン長^{ちよう}ろうは、わか^{ちよう}い^{ちよう}ころ^{ちよう}よく^{ちよう}ス^{ちよう}ポ^{ちよう}ー^{ちよう}ツ^{ちよう}を^{ちよう}し^{ちよう}ま^{ちよう}し^{ちよう}た。フ^{ちよう}ツ^{ちよう}ポ^{ちよう}ー^{ちよう}ル^{ちよう}と^{ちよう}バ^{ちよう}ス^{ちよう}ケ^{ちよう}ツ^{ちよう}ポ^{ちよう}ー^{ちよう}ル^{ちよう}は、と^{ちよう}く^{ちよう}に^{ちよう}よく^{ちよう}や^{ちよう}り^{ちよう}ま^{ちよう}し^{ちよう}た。わか^{ちよう}い^{ちよう}ころ^{ちよう}の^{ちよう}こ^{ちよう}と^{ちよう}を^{ちよう}おも^{ちよう}い^{ちよう}だ^{ちよう}し^{ちよう}て、ダン^{ちよう}長^{ちよう}ろう^{ちよう}は^{ちよう}こ^{ちよう}う^{ちよう}話^{ちよう}し^{ちよう}て^{ちよう}く^{ちよう}だ^{ちよう}さ^{ちよう}い^{ちよう}ま^{ちよう}し^{ちよう}た。

「^{ちよう}夕^{ちよう}方^{ちよう}、^{ちよう}家^{ちよう}の^{ちよう}手^{ちよう}つ^{ちよう}だ^{ちよう}い^{ちよう}が^{ちよう}お^{ちよう}わ^{ちよう}る

と、何^{なん}人^{にん}か^{にん}の^{にん}友^{とも}だ^{とも}ち^{とも}と^{とも}一^{いっ}し^{いっ}よ^{いっ}に、^い家^{いえ}の^{いえ}前^{まえ}の^{まえ}道^{みち}で、^いタ^たッ^たチ^ちフ^ふツ^つポ^ぽー^ぽー^ぽル^るを^るや^るり^るま^るし^るた。わた^わし^たの^し家^かに^には、^に日^{にち}曜^{よう}日^びに^には^にフ^ふツ^つポ^ぽー^ぽー^ぽル^るを^るし^るない、^にと^とい^いう^いル^るー^るル^るが^があ^あり^りま^まし^した。そ^それ^れは^はわた^わし^たの^し家^か族^{ぞく}に^にと^とつ^つて、^とと^とて^とも^も大^{たい}切^{せつ}な^なル^るー^るル^るで^でし^した。わた^わし^たは^はフ^ふツ^つポ^ぽー^ぽー^ぽル^るが^が大^{たい}す^すき^きで^でし^した^たが、^に日^{にち}曜^{よう}日^びに^には^はけ^けし^して^てし^しま^ませ^せん^んで^でし^した。

この^この^のル^るー^るル^るの^のお^おか^かげ^げで、わた^わし^たは^はあ^あん^んそ^そく^く日^{にち}を^をき^きよ^よく^くす^すご^ごす^すこ^この^の大^{たい}切^{せつ}さ^さが^がわか^わり^りま^まし^した。わた^わし^たは^はち^ち家^か族^{ぞく}は^はみ^みん^んな、^あん^んそ^そく^く日^{にち}を^をき^きよ^よく^くす^すご^ごし、^お大^{たい}き^きな^なし^しゆ^ゆく^くふ^ふく^くを^をう^うけ^けま^まし^した。

小^{ちい}さ^さい^いこ^ころ^ろか^から、^に日^{にち}曜^{よう}日^びに^にす^すべ

きでないことをしないようにして
いたために、わたしは、あんそく
日のほんとうのせいしんを知ること
ができました。そして、日曜日
はほかの日とはちがうことが、だ
んだんにわかってきました。また、
あんそく日にふさわしいことをす
る時に、よい気持ちを感じさせる
力があることも、わかってきまし
た。あんそく日を大切にすると、
生活の中に神さまのみたまを感じ
ることができ、いろいろなことが
かわってきます。そして、そのほ
かの日の生活にも、助けがえられ
ます。あんそく日を大切に、あ
んそく日をきよくすごすことがで
きるようになると、神さまのしゅ

くふくが受けられるようになりま
す。」
教会の子どもたちのために、ダ
ン長ろうは、次のようなメッセー
ジをくださいました。「一番すば
らしいしゅくふくは、ふくいんに
したがって生活することからえら
れると思います。時には、ふくい
んにしたがって生活することは、
やさしくないとおもうこともあるで
しょう。でも、小さいころから、
あんそく日をきよくすごすという
ようないましめを守るようにする
ならば、幸福な生活をおくること
ができ、たくさんやしゅくふくを
受けることができます。」



せいしよにでてくるきょうだい

アグネス・ケンプトン^著



どの^{ひと}人とどの^{ひと}人が、きょうだいでしょう。せんでおすんでください。

- | | | |
|---------|----------|-----|
| 1. モーセ | ア. ベニヤミン | 4-8 |
| 2. ヤコブ | イ. アンデレ | 7-7 |
| 3. マルタ | ウ. アベル | 9-6 |
| 4. ソロモン | エ. アロン | 5-5 |
| 5. ペテロ | オ. マルタ | 4-4 |
| 6. カイン | カ. エサウ | 3-3 |
| 7. ヨセフ | キ. ラザロ | 2-1 |
| 8. マリヤ | ク. アブサロム | 2-8 |

むかしむかし、小さな村に年とつた仕立て屋さんと、3人のむすこがすんでいました。むすこの名は、ジャン、ピエール、シャルルといました。

ある日、仕立て屋さんはむすこたちをよんでいました。「わしは、これ

おれないぼうき

お話:ビバリー・スワードロー・ブラウン



までずいぶんとはたらいてきた。そろそろいんきよしたい。そこで、^{みせ}店をお
^{まえ}前たちにゆずりたいと思^{おも}うのじゃ。」

すると、ジャンが^{すす}進み出^でていました。「ありがとうございます。わたしたちはお父^{とう}さんの教^{おし}えにしたがって、やっ^{おも}ていけると思^{おも}います。」

仕立^{した}て屋^やさんはよろこびました。「おすこたちがいつしよにはたらくすがた^みが見^みられるわい。なんと、すばらしいことじゃろう。」

ジャンが^{ふくじ}服地をとっていきました。「わたしは、上^{うわぎ}着をデザインしよう。」

すると、シャルルは^{たの}楽しそうにいました。「わたしはかた紙^{がみ}をつ^{つく}るよ。」

「それじゃあ、わたしがぬ^いお^きおう。」^いピエールも意^き気^きごんでいきました。

仕立^{した}て屋^やさんは、うれ^めしそうに自^めをほそめました。「よし、よし。うれ^いしいことじゃ。」

しばらくすると、^{おと}ドアをたたく音^{おと}がしました。シャルルが^{おと}ドアをあけると、^か書^もきつけ^{おとこ}を持った男^{ひと}の^た人が立^たっていました。「うちのおく^{さま}様^かからの書^かきつけです。」^{おとこ}男^{ひと}の人は、^{かえ}すぐ^{かえ}に帰^{かえ}っていきました。

仕立^{した}て屋^やさんは、^かすぐに書^かきつけをひ^よらいて読^よみました。

「^{らいしゅう}来^{げつようび}週の月^{しき}曜^{しき}日に、^{むらじゆう}おす^{いちばんうつく}め^{うつく}のけ^{うつく}つ^{うつく}こん^{うつく}式^{うつく}が^{うつく}あり^{うつく}ます。村^{うつく}中^{うつく}で一番^{うつく}美^{うつく}しい^{うつく}ド^{うつく}レス^{うつく}を作^{うつく}つて^{うつく}くれた仕^{うつく}立^{うつく}て^{うつく}屋^{うつく}さん^{うつく}には、^{うつく}し^{うつく}ょう^{うつく}金^{うつく}を^{うつく}だ^{うつく}します。」

「これは、^{おも}思^{おも}わ^{おも}ぬ^{おも}幸^{おも}運^{おも}だ。」^{おも}ジャンが^{おも}い^{おも}い^{おも}ました。

「わたしら^{した}の仕^{した}立^{した}て^{した}なら、^かだれ^かでも買^かいた^かがる^かさ。さあ、^{おおいそ}大^{おおいそ}急^{おおいそ}ぎ^{おおいそ}で^{おおいそ}ド^{おおいそ}レス^{おおいそ}を作^{おおいそ}つろ^{おおいそ}う。た^{おおいそ}つた^{おおいそ}の^{おおいそ}ふ^{おおいそ}つ^{おおいそ}か^{おおいそ}し^{おおいそ}か^{おおいそ}ない^{おおいそ}ぞ。」^{おおいそ}ピエールも^{おおいそ}よ^{おおいそ}ろ^{おおいそ}こ^{おおいそ}ん^{おおいそ}で^{おおいそ}い^{おおいそ}い^{おおいそ}ました。

すると、お父^{とう}さんは^かい^かい^かました。「わ^かしは^か町^かに行^かつて、^か服^か地^かを買^かつて^かくる^かよ。明^{あす}日^{あす}には^{あす}帰^{あす}つて^{あす}くる^{あす}わい。う^{あす}ま^{あす}く^{あす}や^{あす}る^{あす}ん^{あす}だ^{あす}ぞ、^{あす}力^{あす}を^{あす}合^{あす}わ^{あす}せ^{あす}て^{あす}な。」

そして、お父^{とう}さんは^か出^かか^かけて^かい^かきました。

シャルルは^{かみ}紙^{かみ}と^{はね}羽^{はね}ペン^{はね}を^{かみ}と^{はね}り^{はね}あ^{かみ}げ^{かみ}な^{かみ}が^{かみ}ら、^{かみ}考^{かみ}え^{かみ}ま^{かみ}した。『^{かみ}し^{かみ}ょう^{かみ}金^{かみ}は、^{かみ}わ^{かみ}た^{かみ}し^{かみ}の^{かみ}も^{かみ}の^{かみ}だ。わ^{かみ}た^{かみ}し^{かみ}が^{かみ}デ^{かみ}ザ^{かみ}イ^{かみ}ン^{かみ}す^{かみ}る^{かみ}の^{かみ}だ^{かみ}か^{かみ}ら。』^{かみ}シャルルは、^{かみ}紙^{かみ}に^{かみ}さ^{かみ}つ^{かみ}つ^{かみ}と^{かみ}服^{かみ}の^{かみ}デ^{かみ}ザ^{かみ}イ^{かみ}ン^{かみ}を^{かみ}か^{かみ}き^{かみ}ま^{かみ}した。

「どれどれ、どんなのがかけたかな。」 ジャンガのぞきこみました。
するとシャルルは紙を後ろにかくして、いいました。「見ないでくれ。しょう金をわたしにしてくれるならべつだがね。」

ピエールが大声でいいました。「そいつは不公平だ。しょう金をもらうのはわたした。わたしがかた紙を切りぬくのだから。」

「さてよ」とジャンがいいました。「服をぬうのはわたしだぞ。ひとはりひとはり、ていねいにぬうのだ。しょう金はわたしのものだ。」

こうしてけんかが始まり、3人の兄弟は一日中いいあらいました。やがて夜になり、朝が来てもまだやめませんでした。そうこうするうちに、お父さんが帰ってきました。お父さんは3人のあらあらしい声を聞きつけて、



いそ ^{なか} はい 急いで中へ入ってきました。「どうしたのだ。」お父さんはいいました。

お母さんは、^{くちやち} □々に「しょう金^{きん}をもらうのは、わたしだ」といいました。お父さんは、まゆをひそめていました。「仕事^{しごと}にかかりもしないうちから、しょう金^{きん}をもらうことを^{かんが}考えているのかね。」

お父さんは戸口^{とぐち}に立^たてかけてあつたほうき^{ほうき}をとり、3本の小えだ^{ぼん}をぬきとっていいました。

「ジャン、お前^{まえ}はこの小えだ^{こえだ}がおれるかね。」

「もちろんですよ、お父さん。」ジャンはそういつて小えだ^{こえだ}をおりました。

「シャルル、お前^{まえ}はどうだね。お前^{まえ}もこの小えだ^{こえだ}がおれるかね。」



「かんたんですよ。」シャルルも小えだをおつてみせました。

「ピエール、お前もおれるかね。」

「ええ、もちろん。」ピエールも小えだをふたつにありました。「でも、それが一体何なのですか。」

するとお父さんは、ほうきを手にとりながらニッコリわらっていいました。

「それじゃあ、このたばになっている小えだをおつてみなさい。」

むすこたちは、かわるがわるやってみました。でも、だれもおることはできませんでした。

お父さんは、おれた3本の小えだを手にとっていいました。

「たしかに、ひとりでしょう金をもらうほうが、ていさいもいいし、自分のとり分も多い。しかし、この小えだのようにまとまっていれば、大きな力が出せるのだ。」

むすこたちは、はずかしそうに顔を見合わせました。

「わたしたちは、大切な時間をむだにしてしまった。もうおそすぎますよ、お父さん。」シャルルはいいました。

するとお父さんはいいました。「そんなことはない。シャルル、かた紙をテーブルにおきなさい。それからピエールが服地を切り、ジャンがぬうのだ。力を合わせれば、すばらしいドレスができるじゃろう。」

それから3人の兄弟は、その日のばんから次の日の日ぐれまではたらい、金曜日にはとうとうそのドレスをぬいあげました。

おくさんは、そのドレスをととも気に入ってくれました。しかしほかにもっと気に入ったドレスがあったので、しょう金はその人のものになってしまいました。

3人の兄弟は、だまりこくって家へ帰っていきました。

お父さんはいいました。「だいぶがっかりしているようじゃな。しかし、お前たちは力を合わせて、りっぱなドレスを作ったじゃないか。こんなにり

つばなものなら、きつとだれかが買^かってくれるじゃろうよ。」

その^{つぎ}の^ひ日、大^{おお}ぜいの^{ひと}人が^{にん}3人の^{きょうだい}兄弟の^{みせ}店へおしかけてきました。

その^{なか}中には、ドレスを^{ちゆうもん}注文したお^くさんの^{むすめ}おすめさんもいました。

おすめさんは、うっとりとしていました。「なんてすてきなデザインなんでしょう。とてもいねいなぬい^{かた}方だし、^{かた}たち方もとてもきれい。きつとわたしによくにあうわ。」

おすめさんは、そのドレスがとても^き気に入りました。そしてそれを^か買、さらに何^{なん}着^{ちやく}が^{ちゆうもん}注文しました。その上、おすめさんの^{うえ}友^{とも}だちやそのほかの^{ひと}人^{ちゆうもん}たちも、^{ちゆうもん}注文していきました。こうして、^{にん}3人の^{きょうだい}兄弟は、^{おも}ほしいと思^{おも}っていた^{きん}しよ^{なん}金の^{かね}何^{なん}ばいもの^{かね}お金を、かせぐことができたのです。



第1回LDSスカウトラリーに全国から400名が参加

一 昨年の末日聖徒スカウトジャンボリーに引き続き、初めての末日聖徒スカウトラリーが9月15日の祭日、東京都江戸川区江戸川河川敷において開催された。七十人第一定員会会員ロバート・L・バックマン長老を迎えたラリーには、曇り空の下、北海道から沖縄までのステーキ部のアロン神権指導者など約150名の参加と、東京、埼玉、神奈川、群馬、愛知県連盟のカブスカウト、ボーイスカウト約250名の参加を得た。

日本韓国地域代表管理役員のブラッドフォード長老の提示によりエリアスカウト協議会委員長の田中健治長老が中心となり企画されたもので、アロン神権若い男性の活動の一部であるボーイスカウトの日本における活動状況を、教会幹部に知って頂き適切な指導を受け、各団の友情を深めることを目的とするものであった。また指導者に、アロン神権若い男性の活動とボーイスカウト活動の関係を理解してもらうための初めての試みであった。

当日管理されたバックマン長老は、ボーイスカウトアメリカ連盟の理事でもあり、スカウト活動には長年にわたり功労のある教会幹部のひとりである。参加したスカウト一人一人と握手を交わし、自らスカウトとしての模範を示された。



●東京都江戸川区江戸川河川敷において開催されたLDSスカウトラリー

開会行事の中で田中長老はスカウトの三条の誓い(1. 神と国とに誠を尽くし、「おきて」を守ります。2. いつも他の人々を助けます。3. 体を強くし、心を健やかに、徳を養います)を紹介し、スカウト活動の意義を説明された。

また、バックマン長老は最後に次のように結ばれた。『備えよ常に』『日々の善行』



●バックマン長老から記念の参加綬を受けるスカウトたち

をスローガンに生活するスカウトプログラムはまさにアロン神権の精神を実践するものです。各地のステーク部や伝道部に於てこのプログラムが実施されるように望みます。」

その後、広い河川敷を各団が思い思いに利用し、準備したゲームや実演などで楽しい一時を過ごした。(レポーター：LDSボーイスカウト・エリア評議会事務局長・細谷佐)

初等協会音楽発表会

—福岡ステーク部佐世保支部—



●(写真左)明るい少女、開拓者、勇者クラスによる合奏

(写真右)ひかり、星、CTRクラスによる合奏

私 たち佐世保支部では、去る8月4日(木)の夜、初等協会の音楽発表会を行ないました。このために5月より準備を始め、毎週2回集まって練習を重ねました。また夏休みにはほぼ毎日、午前中一杯は教会で練習しました。

3歳のひかりクラスから11歳の開拓者/明るい少女クラスまでの19名が出演しての初めての発表会です。幅広い年齢層なので、まとめるのは大変でしたが、皆よく練習して、素晴らしい発表を行なうことができました。

プログラムは、ミュージカル「ピーターとおかみ」を初め、「アルテナーよりメヌエット」「夕やけこやけ」などの合奏や「た

なばたさま」「大きなりの木の下で」のリズム打ち、ピアノ合奏、エレクトーン演奏、合唱という盛り沢山の内容になりました。

約1時間のプログラムでしたが、元気のよい一生懸命な発表に集った人々から盛んな拍手を受けていました。練習の成果があって想像以上の出来栄に、両親や指導に当たった初等協会の先生方は満足そうでした。また出席された近所の人々や会員でない方々にも喜んでいただけたのは何よりでした。これからも、このような子供たちの発表の機会を持ちたいと思っています。

(レポーター：福岡ステーク部佐世保支部支部長・原都夫)



中国伝道に向けて

●台湾からのレポート



台北東ステーク部
台北第1ワード部

小針 彰彦

「も」しも日本が日本人の宣教師を1,000名送り出し、最終的にモンゴルや中国に向けて10,000名以上の宣教師を派遣することができたならば……その時私たちは夢を実現する第一歩を踏み出すことになるのである。」(スベンサー・W・キンボール、地区代表セミナーにおける説教、1974年4月4日)

キンボール大管長が日本人は中国大陸へ伝道に行くように話されてすでに9年たちました。私は今から11年前に教会員となりましたが、その頃から中国に伝道に行きたいという強い願望があったので、その年の4月、大学の中国語学科に入りました。もし中国伝道のために何かお役に立てることがあればいつでも主のために奉仕したいと思っていました。しかし、日本における中国伝道の準備はまったくなされていませんでした。

3年前、東京に神殿が建った時、台湾(中華民国)の教会員の方々も日本に儀式を受けに来ると聞いて少しでも彼らのために奉仕できればと思い、退職し、半年ほど台湾

の大学で妻と共に中国語を勉強しました。帰国後、住まいが神殿とかなり離れていたので十分とは言えませんが、台湾の方々が来られた時は微力ながら奉仕できました。

もうそろそろ中国伝道の準備が始まるだろうと思ったのですが、一向にその気配がなく、このままではいつまでたっても中国伝道は進まないと感じました。それまで、町田ステーク部内で中国語同好会や中国研究会などを通して若人に中国語の学習や中国研究について呼びかけをしてきました。しかしこの行動のみでは十分中国伝道を押し進めることができないと思い、ずっと悩んでいました。

ある時教義と聖約第58章26節から28節の「見よ、われ汝らにすべての事を悉く命ずるは至当ならず。……人は努めて善き業に従い、多くの事をその自由意志によりて為し、多くの正しき事を為し遂げよ」という聖句が目に残り、何かで胸を差し貫かれる思いがしました。何かの行動を起こすように指示を受けるまで何もせず怠惰な気持

ちで待っているのではなく、自らの自由意志による選びによって自らの行動を起こさなければならぬと強く感じました。それで直接台湾に行き、大学や大学院で語学に磨きをかけながら、台湾の教会員の協力を得て、中国伝道に備えようと決心しました。主が望まれる事ならばきっと神の助けがあると確信していました。

その後、台湾に行くまで多くの障害を乗り越えなければなりません。まず両親、親戚への説得はとても大変でした。私ひとりだけではなく、妻とふたりの子供を連れて外国で生活するようになるわけですから、少なからぬ精神的、経済的困難が伴います。教会員の妹には本当のことを話したのですが、両親には中国伝道の奉仕のために台湾へ行くとも言えず、将来の仕事のためにどうしても台湾で勉強しなければならないと説得しました。

その次の障害は経済的な問題でした。家族4人ですからかなり生活費がかかります。なおかつ台湾での安定した仕事があるわけではなく十分な貯金もありませんでした。その時、渡辺正通兄弟御家族、鈴木兄弟御家族よりアドバイスと援助を得て、何とか当座の生活費と旅費を貯金することができました。そして台湾でのアルバイトの件や住む家については私たちの紹介で台湾に留学している土持兄弟（現在台湾高雄伝道部で伝道中）の助けによりなんとかやっていける道が開けました。

そのようなわけで昨年12月24日台湾に來ることができました。こちらに來て大学の手続きは完了したのですが、引き継ぐはずのアルバイトがいろいろな事情があって数が少なくなり、とうとうひとつになって

しまいました。貯金は見る間に減っていき、そして今年の2月（旧正月）にはアルバイトがとうとうなくなってしまいました。私はその時、もし主が私たちを必要とされるならばきっと助けが得られると思っていました。私たち家族は正当な方法によって生活できるだけの収入があるように祈りました。

丁度その時、高雄にいる中国人の友人が1週間ほど私たちの家に滞在し、日本語を教えるための新聞広告を出す手伝いをしてくれました。普通、新聞広告を出してもほとんど効果がないそうですが、新聞に載ってから3日間、朝から夜中まで電話がなり続け、生徒が60名ほど集まりました。その時友人は私たちにこう言いました。「きっとあなた方の神があなた方を助けたのでしよう。」私たちは心より神に感謝しました。生活は何とかできるようになりましたが、忙し過ぎて体が疲れるようになりました。すると今度は生徒が減っていき、それに変わって効率のよい仕事がかんどん入ってきて勉強と仕事が両立できるようになってきました。

今年の6月にビザの書き換えで日本に帰ったのですが、後の生活が大変でした。わずかの蓄えも往復の旅費でなくなり、とうとう生活ができなくなってしまいました。月の終わりにアルバイトのお金が入ってくるまで収入はなく、途方にくれました。私は自分の血を売ってそれを生活費に充てようと思いました。その日の朝、友人から電話があり、口答試験の試験官のアルバイトと録音のアルバイトが入ってきました。その2日間の収入は丁度月の終わりにアルバイトのお金が入ってくるまでの生活費と同

じ額でした。私たちはその時、主に守られていることがはっきり分かりました。そして主のためにもっと頑張らなければならないと思いました。

最近になって日頃のアルバイトのやり過ぎと暑さのために私はとうとう倒れてしまい、激痛がありました。医者に診てもらおうと尿道管結石（尿道に石がたまる病気）ということでした。石の大きさを調べるのでレントゲンを撮ると言われました。翌日、私は伝道部長より癒しの儀式を受けました。すると次の日、痛みが止まり、病院でレントゲン撮影をしたのですが石がどこにも見当たらないと言うのです。医者は首をかしげるばかりで、どこにも悪い所がないからすぐ帰るように言われました。また家族も疲れからいろいろな病気にかかりましたが、主から祝福されて皆健康を回復しました。

台湾は第2次世界大戦終了までの50年余にわたり日本が統治し、教育も日本語で行なわれてきました。戦後、台湾は中国に返還され、言語は中国語となりました。しかし今も日本語、台湾語はできても中国語を聞き、話すことのできない人々があります。台湾の伝道部ではこれらの人々に伝道するために、日本人宣教師を必要としています。これらの人々には日本語を使ってしか福音を宣べ伝えられないのです。もちろん伝道する時は日本語だけでなく、一般の人々には中国語でも伝道するのですが、中国語の方は3カ月もすればある程度話すことができますと日本語の上手な台湾の伝道部長は語っています。また、さらに日本人の宣教師が台湾に召されるのを一日千秋の思いで待ってられます。

台湾での伝道ばかりでなく、時至って中

国大陸（中華人民共和国）が福音の門戸を開き、日本人宣教師がその地を訪れる時こそ、キンボール大管長のビジョンが現実となる時なのです。（こぼり・あきひこ）

異国の地(台湾)に召され



台湾高雄伝道部
名古屋西ステキ部岩倉支部出身
丹羽 敦

今 年の4月、異国の地である台湾に専任宣教師として召されました。台湾の兄弟姉妹や日本にいる私の家族、そして主からの愛と励まし、助けを得て神様のみ業に励むことができますことを深く感謝しています。

昨年(2007年)の11月、父を軟骨肉種（ガン）で亡くして、私と母、そして寝たきりの身体障害者である弟との3人家族となり、伝道に出られるか心配していました。しかし幸いにも、母は私が伝道に出るのを快く許してくれ、その上しっかりやってきなさいと励ましてくれました。母の思いやりと愛をうれしく思っています。

名古屋から召された最初の9日間は、東

京のJMTC（日本人宣教師トレーニングセンター）で、訓練を受けました。全国から37名の兄弟姉妹が集まり、ブラッドフォード長老や伝道部長の経歴を持つ方々から指導を受け、伝道への気持ちを一層鼓舞させることができました。

9日間という短い期間ではありましたが、みんなで共に学び、祈り、神殿に参入してエンゲウメントを受け、思い出深い日々とすることができました。この期間に皆と多くのことを語りあうことはできませんでしたが、一人一人の証を聞き、行動を共にすることにより深い友情を育むことができました。このJMTCで得た経験や証を決して忘れることがないと思います。

任地の台湾に来てからは、やはり日本とは勝手が違い、やることなすことがみな初めてのことばかりで、毎日が、伝道と中国語の勉強で瞬間に過ぎていきます。

私は大学の選択科目で中国語を履修しましたが、身を入れてやらなかったために、まったくと言ってよいほど中国語を話せませんでした。しかし、こちらに来てから日日の勉強で、また同僚や兄弟姉妹たちから言葉を学んでいく内に、少しずつではありますが話せるようになってきました。まっ先に、祈りと証を中国語で覚えました。まだまだ流暢には話せませんが、求道者とのレッスンや同僚との祈りの時に私の証を述べることにより心は平安になり、喜びを覚えます。

私の所属する高雄伝道部では年2回、宣教師大会が開かれます。去る6月に2泊3日の大会が開かれ、伝道部の宣教師が全員集合しました。最終日の早朝に行なわれた証会で、とてもうれしい証を聞きました。

ある中国人の姉妹宣教師の証です。彼女は初め私たち日本人が大嫌いだったそうです。なぜなら昔、日本人が戦争時に台湾の人たちにした残酷な話をいつも両親から聞かされていきましたので、反日感情を強く持っていたからです。しかし、3日間の大会から私や土持長老の行動を見て、また証会での私のつたない中国語での証を聞いて、日本人に対する感情が大きく変わり、大好きになったと証して下さいました。

私はその証を聞いてとてもうれしく思いました。また同時に、宣教師として教会員として、自分自身の模範がいかに重要であるか思い知らされたように思いました。

台湾での伝道が開始されてからすでに24年になり、来年には台北に神殿が完成します。また、台湾の教会員も着実に増えて、人々の福音に対する関心が高まっています。このような素晴らしい地で伝道できることを喜んでいます。

台湾には、日本人宣教師は私と土持長老のふたりしかいないのですが、近い将来、さらに多くの日本人宣教師が召され、台湾だけでなく中国大陸にも主の言葉を携えていくようになるのでしょうか。

私は希望と信仰そして愛をいつも持ち続けたいと思います。

中でもすべての人々を愛することのできる真実の愛を育てていきたいと思えます。「汝^{すべ}須らく謙遜なれ、さらば主なる汝の神は手を取りて汝を導き汝の祈りに応えん。われ汝の心を知れば、汝の兄弟たちに就ける汝の祈りを聞けり。汝の兄弟たちを多くの他の者に勝りて偏より愛することなく、己れを愛する如くほかの者を愛せよ。すべての人々を豊に愛せよ。またわが名を愛

する者を豊に愛すべし。」(教義と聖約112：10-11)

神は生きておられます。私たちを導いて祝福を与えて下さる神に感謝しています。

(にわ・あつし)

日本語と中国語の伝道



台湾高雄伝道部
横浜ステークス部横浜第1ワード部出身
土持 博徳

初 めて中国語に触れたのは、約2年前のことです。それまではまったく中国語を勉強した経験がなく、中国人の風俗習慣などの知識もきわめて乏しいものでした。けれども、いつの日か中国で伝道したいという気持ちと短期間に中国語を理解し、話せるようになりたいとの強い思いから奮起して台湾へ渡りました。

まったく何も知らない地へひとりで行くのはとても不安でした。日本で小針兄弟から紹介していただいた台北にいる林さんが唯一の頼りで、その方からの好意と援助によって1カ月後には無事、台北国立師範大学の国語センターに入学することができま

した。

ここでの授業はすべて中国語(北京語)で行なわれるので初めの間はまったく先生の話が理解できませんでした。それで毎日、授業のために3倍の時間、予習、復習を続けました。その内に段々と先生の言っていることが分かってきた時はなんともいえないうれしさが込み上げてきました。

また毎週日曜日、台北の教会に行くことにより、言葉があまり分らなくても教会のいろいろな活動に参加し、中国人の中に積極的に入っていくことにより、言葉だけではなく、風俗習慣、民族性といったものをじかに学ぶことができました。

中国人と日本人は同じ東洋人ですので姿形は似かよっていますが、風俗習慣、民族性となるとその違いの大きさに驚きます。しかし、このような違いがあっても教会のいろいろな活動を通して彼らと接していく内に、共に同じ神様の子供であり、キリストの下にあってひとつになれることができるという思いを強く致しました。また台北の会員から受けた数々の素晴らしい模範や愛はいつまでも忘れることはできません。

現在自分の夢、希望がかなって主の直接の僕、宣教師として中国の人々に福音を伝える機会が与えられていることに深く感謝しています。

台南で伝道していた時、ある家族に日本語でレッスンをする機会がありました。御主人の郭さんは旧日本軍の通訳をしていたこともあって北京語より日本語の方がよく理解できます。奥さんも日本語がよく分りますのですべてのレッスンを日本語でしました。郭さんは今年64歳になられます。18年前病気をきっかけにキリストを信じるよ

うになり、3人の息子さんとふたりの娘さんの家族全員で教会に行くようになったそうです。それから4年後、末日聖徒のふたりの宣教師が郭さんの家を訪れましたが、すでに他の教会の会員となっていましたので、彼らを受け入れませんでした。しかし最近いろいろ矛盾を感じるようになり本当の真理を知りたいと願っていたところに私たちが訪問しました。その時、真理を求めておられた郭さんは私たちのメッセージに耳を傾けて下さいました。また、恵まれて丹羽長老が台南に転勤してきましたので郭さんの家に丹羽長老と訪問できました。この時の様子をすべて書くことができないのが残念ですが、郭さんの家でのレッスンはとても霊的なもので、いつも神様のみたまと満ちあふれんばかりの愛を感じました。

郭さんは病気のために体の一部がまだ麻痺したままの手をさすりながら私たちをじっと見つめ、「あなたたちの話がすべて真実

であることを信じます。もう自分の罪を悔い改め、バプテスマを受ける決心をしています」と私たちに話してくれた時は、郭さんの強い証と信仰に、胸に熱いものを感じ、深く感動しました。残念ながら転勤のため郭御家族のバプテスマを見ることができませんでしたが、丹羽長老からの手紙により郭さんがバプテスマを受けたこと、またそのバプテスマ会のすべてが日本語によって行なわれたことを知り、神様にこのことを感謝せずにはいられませんでした。

今、この台北の地で日本語と中国語の2カ国語を使って伝道できることに心から感謝しています。日本の隣の中国には日本の十倍以上もの人たちがいます。国の事情によりまだ伝道が行なわれていませんが、私たちがこのような国にも福音が宣べ伝えられるよう絶えず祈り、自らを備えるなら、必ずや福音が伝えられる日がくと確信しています。(つちもち・ひろのり)



子供を育てる喜び

新潟地方部新潟第1支部
錦沢 ヤス

ほど遠く、どのように子供を育てたら良いのか毎日祈り求めながら生活しています。

子供の行ないが善かれ悪かれ、毎日子供に教えられることがたくさんあります。親は子供によって育つと言った人がいますが、まさにその言葉通りです。

長男が生まれて以来、私たちが福音に添

神様が生きていらっしゃるという証を持って、子供を導き育てることができると心からうれしく思っています。結婚して子供が生まれたら、このように育てたい、育ててほしいと考えたものですが、いざ子供が生まれてみますと、理想からは

った生活をするなら必ずやその模範によって育てられるだろうと信じ、努力してきたつもりですし、今もその気持ちに変わりありません。それが故に、長男にはこうあってほしい、こうあるべきだと期待をかけてしまい、それが子供にとって負担になっていることを知った時、自分の子育ての至らなさを恥じました。4人の子供にはそれぞれ違った個性があり、育てていてとても楽しいものです。そうは言っても、ふたり目が生まれた時が一番大変でした。神に絶対の信頼をおいて祈り、努力することによって導きが得られ、子育ての要領も分かってくるようになりますと、3人目からは何人生まれても同じと思えるほどになりました。

長男が生まれた頃は、教会の中で小さい子供がいるのは私たちだけでしたので、子供が動くとき霊的雰囲気なくなるから決して自分の手元から離さないようにと言われたことがありました。その時は自分自身のこと以上に身を切られる思いでした。母親にとって日曜日、一番気疲れする日です。子供が風邪を引いて教会に行かれない日は、ほっとしてうれしかったこともありました。私たちにも生活の波があるように子供にも波があります。あの子は静かにしているから良い子、この子は騒ぐから悪い子と思いがちですが、気を付けなければならないことと思います。子供にもいろいろなタイプがあって、言われなくても静かな子、言ってすぐに聞く子、言っても言っても聞かない子と様々ですが、言ってもなかなか聞かなかった子が、ある日突然言い続けていたことを聞き分けてくれた時のうれしさは、例えようがありません。また、これまで祈

り続けてきたことが聞き届けられたことによって今までの苦労も一遍に吹きとんでしまいます。この一件から、祈り続けることの大切さを子供から教えられました。

良い子は良い子なりに得るものがありますが、わんぱくであればあるほどその子から得るもの、教えられることもたくさんありますし、謙遜にしてくれます。また人の良い所を見つけるように教えてくれたのも子供でした。

教育には時間がかかると言った人がいます。何でも短時間でやろうとすると無理がきて失敗することが多く、親が焦れば焦るほど子供は親から離れていくようです。焦らずに心をかけて人の子を見る余裕を持って育てられたらといつも思っています。

自分の子供だけでなく、また教会内の子供たち一人一人に関心を払い、声をかけて励ましてあげたり、注意をしてあげることによって、教会内の敬虔さを育むことのできるのではないのでしょうか。どの子も神の子として見るができるようになるなら、子供たちを適切に助けられると思います。

支部評議会の時、子供たちがうるさくてと言われたことがあります。評議会の後である兄弟は、「私は子供のことは気にならないが、昔少女だった人のひそひそ話の方がもっと気になる」と言いました。とても耳のいたい言葉でした。

4人の子供に等しく心をかけていないと、時々失敗します。次男は最近良い状態だと思って、わんぱくな三男に集中していると、ポツと何か問題を起こしてしまいます。ひとりが良ければひとりが良くなかったり、4人一緒に良かったり悪かったりすることはありません。ですからいつも4人平等に

心をかけています。

子供を育てる時に厳しくとか優しくとかいろいろあると思いますが、子供によって育て方は違いますし、成長する時期によっても違うと思います。また、今の社会の波は知情意の知である知識ばかりを小さい時から詰め込まれて、肝心なしつけがなっていない子供がたくさんいると聞いていますが、私は情のある優しい子供に育てたいと望んでいます。また、浅くて固い心の畑から石ころや雑草を取り除き、心の畑が軟らかくなるまですきかえしてやれたらと思っています。

夫は私が子育てで悩み、ついぐちをこぼすと、「私の妻は世間や社会のことを気にして子育てをするような弱い妻ではありません」と私を励ましてくれます。その一言が迷いがちな私の子育てに確信と自信を与えてくれます。また家庭を大切にし、家庭を守ってくれる夫に感謝しています。(にしきざわ・やす 1944年生まれ、新潟第1支部初等協会第一副会長)

編集室から

●「各地のたより」「私の証」「職業と信仰シリーズ」などの原稿をお送り下さい。また、今月号は知恵の言葉と「教会での子供たち」を特集しましたが、それを読まれての感想文、皆様の体験談などをお寄せ下さい。1月号掲載分締切は11月15日(必着)です。投稿には必ず連絡先(電話番号)を記入して下さい。宛先：〒106東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集部。●おわびと訂正：10月号1ページの人名マリオン・G・ロニーはマリオン・G・ロムニーの誤りです。

会社の閉鎖と教会での責任



研究開発室長
町田ステーキ部町田第1ワード部
大坂 漸

私 が長い間務めていた会社の突然の閉鎖を知らされたのは、昨年1月、正月気分はまださめやらぬ頃でした。

外出先から会社に戻ってみますと、閉鎖の大きなショックのため社内は水を打ったように静まりかえり、人けがなくなっていました。会議室はと見ると、皆ただ黙々と座っているばかりで、青ざめた顔からは今後の生活に対する不安が読み取れました。この不景気に、ある程度の年配の人たちが新たに職を探すのは大変なことでした。

私は早速妻に電話で会社の閉鎖を伝えましたが、思いのほか冷静な声で「分かったわ。頑張てね」というのです。その明るい声に励まされ何かほっとした感じがしました。閉鎖の説明を受けている時も私は神の教えを喜んで守っているのです、きっと助けが得られるという確信があり、心に平安がありました。他の人々はといいますが、

ショックで1週間食事がのどを通らない人、眠れない人、ふさぎ込む人、怒りっぽくなる人など様々でした。

私は家に帰っても、会社の閉鎖については憂慮していたものの、教会の責任があり毎日忙しく働いていました。特に私は東京神殿がオープンして以来、毎週火曜日の夜は神殿での責任を果たしてきました。妻もよく協力してくれ、いつも車で駅まで送り迎えしてくれます。その日はいつも夕食を取ると夜の11時半頃になりますが、休まず続けていました。そのほかに妻も私もステーキ部の責任がありましたので、会社のことばかり心配する訳にもいかず、食事をおいしくいただき、ベッドに入ると疲れてぐっすり眠るいつもと変わらぬ日々を送っていました。

ある日妻が「私たちも教会の教えを知らず、責任を持っていなければ心配で病気ででもなりかねないでしょうね。これだけでも祝福ですね」と言いましたが、まったくその通りだと思いました。しかし、私がこれほど落ち着いていられたのには、私たち家族が守られているというもうひとつの証があったのです。

会社の閉鎖発表の3日前、ある会社の部長が我が社を訪問され、その方と話をしていた時のことでした。その時、この会社の責任者と会う約束を得るように心が動かされました。私はそれがみたまの導きのように感じましたので、(主の導きを受ける時は、最後までその意味が完全に理解できないこともしばしばありましたので)何の用件で会うのか分からないまま面会をお願いをしました。このことがあったため、閉鎖の話聞いた時にすぐ、就職の件で神が前

もって道を備えて下さったと感じました。それで社長と会う前に、社長自身とその会社に関心を示すと思われる試作品を急いで作りました。このサンプルは1平方メートルほどのものですが、妻もミシンでブルーの布カバーを作ってくれました。

いよいよその会社の社長と会う日、断食をして出向きました。サンプルを持って社長室に入ると重役の方が遠くからふたり来られていて、彼らに私の試作品を見てもらうととても気に入られ喜ばれました。「会社が閉鎖したので私はどこに務めるか分かりません」と話したらとても驚かれ、社長も重役の方も我が社にとっては良いニュースだと言って笑っていました。「良かったらぜひ我が社に」と親切に言って下さいましたが、その場では返事をためらいました。なぜならあまりにも職種が違っていたからです。

夕方になって社長と部長とで料亭に行き、酒を飲む段になりました。私はクリスチャンであり知恵の言葉を守っていることを伝えました。社長は最初げんそうに聞いていましたが、決して社長を軽んじて酒を断わっているのではないことが分かると本気で私の話を聞いて下さいました。そして帰る頃に「大坂さんは魅力的な人です。あなたのような人は初めてです」と言われました。おそらく、私のように社長に酒を勧めないような客は初めてだったのでしょう。また、「近日中に部長とドイツへ市場調査に行ってくれませんか。そうすればうちの会社の業界を理解していただく上で参考になると思います。けれども就職先を決めるのは自由に、他社でも好きなように選んで下さい」と言われました。私はこの言葉に感

謝しました。やがて何日かして旅行に必要な切符と書類が送られてきました。

これとは別にいろいろな方法で新しい職場を探していました。北は北海道から南は九州まで話がありましたが、その中でぜひ採用したいという会社が2社ありました。この2社はそれまでの会社の研究所と同じ分野の仕事内容でしたので、私個人としては行きたい職場であり、サインすればOKの状態になっていました。

いよいよ最終の会社を選ぶ段となり、私は断食して、神殿でどの会社が良いのか祈り求めました。その結果、心の中に『よりあなたを求めている会社を……』との答えを得ました。それまでは、より自分の求める会社をと思って捜していたのに、その逆の立場で判断するように導かれた感じがしました。そんな訳で今の会社、すなわちドイツ行きを頼まれた最初の会社に決めました。

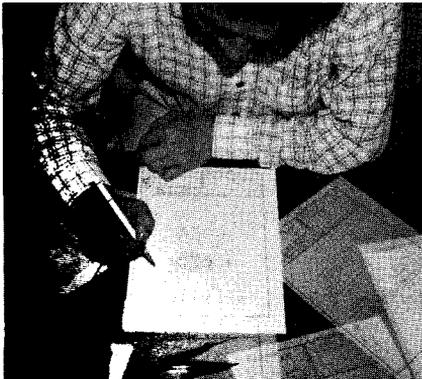
この会社はメーカーですので、新製品を造る開発部で働くことになりました。当初は友人たちから「随分分野の違う会社へ行ったね。もっと楽で大きな会社があったのに」と言われました。しかし自分で選択した会社です。今は一生懸命働いています。だれでも同じでしょうが、新しい会社で新しい仕事をすると思像以上に疲れるもので

す。通勤時間も片道2時間ほどあり、立ちっぱなしの電車通勤は大変でした。しかしこんな時でも神殿の責任は一日も休まないようにしていました。なぜなら祝福が一杯あったからです。

入社早々の初仕事は、クレームが多発していた自社製品に対し、会社の信用を取り戻すべく短期間に新製品を開発するプロジェクトチームの設計リーダーになることでした。幸い入社条件として、月火水は残業せず教会の責任をしてもよいことになっていましたので、神殿の責任がある日は同僚から「もう時間ですよ」と声をかけられ、忙しくても神殿に行くことができました。そのお陰で神殿の帰り道、いつも仕事を解決するための素晴らしいインスピレーションを受けることができました。

そんなある日、新製品のメイン部のメカニズムがどうあるべきかという問題で、5人のベテランの技術者たちと数日間考えあぐんでいた時のことです。明け方ひとつの夢を見ました。それは見たこともないメカニズムの設計図でした。それが欲しているメカニズムであり、シンプルなものでしたので、急いで近くにあった紙に書き留めました。そして再び床について、それが正しく作動するかどうか考えてみましたが、難しくすぐには理解できそうにありませんでした。それほどシンプルな装置でありながら、今までに見たこともないメカニズムだったのです。

朝起きてゆっくり目を通しますと、図面の内容が確かなものであることが少しずつ分かってきました。うれしくなって妻に「夢で見たこの図面は、どうも正しいらしいよ」と話しました。しかし、それが実際に有効な



装置であるのを知り、他人に説明できるようになるまで理解するのに、それからさらに2週間もかかりました。その理由は三角関数の三次限の問題だったからです。

このお陰で開発は急速に進みました。現在市販されている製品はこの考え方を取り入れたものになっています。そして市場における会社の信用もこれによって回復され、製品の売れ行きは好調に伸び、会社の役員の方から信頼を得ることもできました。また社長も気をよくして、私の好きな人を探

用して良いと言って下さいました。早速、アメリカに移住して、日本での職を探していたある家族を日本に呼び戻し、入社してもらいました。これで会社にふたりの神権者が存在することとなり、彼と共に毎週神殿で奉仕をしています。

これまでもいろいろな面で私たち家族は守られてきましたが、今後も主に忠実であるならば、変わらぬ導きと守りがあるものと確信しています。(おおさか・すすむ 1939年生まれ、町田ステーキ部高等評議員)

読・者・の・ひ・ろ・ば

●「聖徒の道」を読むのは宣教師である私にとっても楽しみのひとつです。地方の小さな支部にいたのでなおさらのこと、この機関誌が懐かしく思われます。宣教師として孤独を感じることも時にはあるのですが、「聖徒の道」の特にローカルページで、日本の聖徒たちの様々な証や私の出身支部、ステーキ部の記事を読むときは、勇気づけられ頑張ろうという気持ちになります。確かに、この「聖徒の道」は日本の聖徒をひとつの道に導くパイプ役を果たしていると思います。

私のように改宗して、付属図書館に出た者には、アパートにある古い号を見つけてページをめくるのがいよいよ喜びです。日本の教会歴史や多くの人の経験談、証から多くのことを教えられます。日本の教会の土台を築いたこれまでの聖徒たちの信仰に感謝と尊敬の念を深く致しました。また、いろいろな状況にある人々の改宗談から福音を宣べ伝える上で多くのヒントを得ています。やはり日本人の心をよく理解できなければ人々の心に食い入ることがで

きないように思います。

私の家族の中で末日聖徒は私ひとりだけなので、姉たちにもなかなか理解してもらえず、またそのための努力もあまりしないまま伝道に出てしまいました。昨年暮れに「聖徒の道」のクリスマスプレゼントの企画を見て心に感じるものがあり、少ない伝道資金の中からも姉ふたりと私の伝道が終わるまでの丁度1年分を予約し、プレゼント致しました。これまでそれについて何も言っていない姉が、「最近『聖徒の道』を読んでいて、おまえの気持ちがよく分かる」と手紙に書いてくれました。伝道や教団について理解してくれるようになり、自分の人生についても時々考えているようです。私はその事をとでもうれしく思います。

この靈感に満ちた「聖徒の道」を自分の愛する人にとって差し上げるなら、人々は私たちのメッセージを理解して下さるでしょう。

この教会が真実であり、伝道の業が本当に素晴らしいものであることを心から証します。(札幌伝道部専任宣教師・伊藤誠・25歳)

モルモニズム



「私は先週の金曜日と土曜日に行なわれたスカウト・キャンプの楽しい活動についてお話したいと思います。」

「パパの言う通りだったよ。おじさんのお話って、ほんとにつまらないね。」



「おや大変だ。私の妻はどこだ？だれか私の妻を知らぬか？」



「ノア、早く来て下さい！シロアリが逃げ出しました！」

「……そしてどうぞこの食物を祝福し、ぼくたちに必要な栄養と力をさらに与えて下さい。」



「……私は別に何も望んでいません。でも私のお母さんはきっと義理の息子を欲しがっていると思うんです。」



